

念願のウマ娘に転生し
た俺が曇らされるんだ
が？

ホツケ貝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

念願のウマ娘に転生！やったぜ！

ん？ちよつと世界おかしくない？

ファ!?俺の事をこれでもかと曇らせてきやがるぜこの野郎……!!

ウマ娘に転生した男が、これでもかと世界そのものに曇らせられるお話

なお、日本へやって来た時の周りは勘違いするものであるとする（意味深）

目次

第一章 天国への階段

第1話 鳩よどこへ飛んで行く

1

第2話 魂の祖国、安らぎの地へ

26

第3話 故郷が追いかけてくる!!

52

第4話 模擬レース

80

第4.5話 嘗ての英雄に告ぐ

100

第5話 理解と、その果てにあるもの

111

第6話 2000ヤードの凝視

134

第7話 メイクデビュー

155

第一章 天国への階段

第1話 鳩よどこへ飛んで行く

「うしろおおお!!」

切羽迫った声が聞こえてきたのでとつさに振り返える。

なんと、安全対策ガン無視トラックが猛スピードでこちらに向かって迫ってきていたのである。

—これはむりだな—

と冷静に事態を察した俺は目を閉じ、死を受け入れた。

—はずだった。

「おぎゃ〜！おぎゃ〜！」

生きてる。

なん10トンにも及ぶ鉄の塊にひき潰されたはずなのに、意識があるのだ。

そして、意識が目覚めてから間もなくして、体と周囲の違和感に気づく。

「Estitamo. Rodila se zdrava beba. (おめでとうございます。元気な赤子が生まれましたね)」

ちよつと何言ってるかわからないっすね…。

まず、最初に気づいた違和感は体だ。

毛布に包まれて身動きがとりづらいが、頑張つて下を見ると、どうにも下半身が脆弱すぎる。

現場作業で鍛え上げられたあれほどの筋肉は何処へ…？

そして、隣に医者と思しき欧州風の顔立ちのおじさんがいることから、今の俺は赤ちゃんになっているという事を察した。

「Hvala ti sto si rodila (出産お疲れさまでした)」

そして、明らかに日本語ではない言語が平然と話されている。

転生特典で言語翻訳チートだとか、そういうものは貰ってないので、何を話しているのかまったくもって俺にはわからない。

これから勉強して理解していく必要があるのだろう。

肉体の変化、周りの人の人種、言語……それらの要素を受け入れて、ようやく俺は転生したという事実を把握した。

前世の俺はアプリウマ娘を少し嗜む程度のしがな土木作業員で、労基にチクツたら一発K.O.になりそうな労働環境で働いていた。

「もう終わりだよこの国」だなんて愚痴を吐きつつ水面下で転職活動をしていた最中、不幸にも白塗りの大型ダンプの下敷きになってしまい、俺の人生は労災死亡 end を迎えてしまったはずだったが、転生した：というのが、ざつとまとめた今の状況だ。

「マジでどうすりゃいいんだ」、というのが今の感想だ。

いきなり死んだと思ったらいきなり赤ちゃんに転生して、しかも言葉が通じない異国の地に飛ばされただなんて、情報量があまりにも多すぎて、何から手を付けて処理すればいいのかもまったくもって分からない。

「おぎやあ！おぎやあ！（助けて！誰か！）」

「Boze, plasma veselo:（あらあら、元気に泣いちやって:）」

必死に言葉を発しようとするが、器官が未発達なのか全部赤ちゃん語に翻訳されるというまさかの詰みゲー状態に陥る。

クソゲーじゃねえかちくしよう！

そして、不本意ながら泣きじゃくる俺を抱きしめている母親と思しき女性が、俺のほっぺたに頬ずりをしてあやしてくる。

その時になってようやく気付いたのだが、なんと母親の頭にウマ耳が付いていたので

ある。

前世でウマ娘をプレイしていた俺は、それが「コスプレなんじゃないか？」という疑問よりも早く「ウマ娘だ！」という確信が早く来る。

という事はつまり、ここはウマ娘時空という訳だ。

俺は、アプリや有志が描く二次創作などのウマ娘コンテンツが大好きだったので、ウマ娘時空に転生できたのはうれしいっっちゃ嬉しいのだが……いかんせんこんな状況じゃ、素直に喜べない。

それから数日して分かったことがある。

まず、自分の名前はスパシテルということ。

それと、俺自身もウマ娘であるという事だ。

まさか性別転換を果たしてしまうとは思わず、男のシンボルを失ってしまったことに悲しみ嘆く。

だがしかし！逆に考えてみれば、女になったんだから、百合の間に挟まっても理論上は大丈夫ってなわけだ。百合の間に百合を挟んでも汚れないからセーフ！

しゃあ！これで推しをもっと近い所から観察することができるとポジティブに解釈するが、今の状況だと、そもそも例のトレセン学園に入れるか自体不明瞭だ。

それから数日、数か月、数年……気づけば小学校低学年になっていた。

ここまでくると、さすがに現地の言葉を理解し、今じゃ現地の言葉で普通に会話できるようになった。

そして、より詳細な情報も手に入ってくる。

母含め大人の会話からは、よく『チトー』『共産主義者同盟』『兄弟愛と統一』といった単語が出てくる傾向にあることに気づいた。

いや、まさかな……と、最悪の事態を危惧していたが、これでもかと言わんばかりに俺を曇らせてくるのだ、この世界は……。

なんとここは“ユーゴスラビア”なのだとか。

まさかの共産圏?! あかん! これじゃあ自由が抑制されるう!

と言うか、これじゃあ海外に行くことができないうやないか怖いなあ……もう絶望するしかない。

ひとたび市街地を歩けば、薄い色のトレンチコートを身に纏った人々が、配給切符片手に長蛇の列をなしている。そして、その長蛇の列に俺と母さんとで手を繋いで加わるのだ。

ラジオからは、この国の指導者のチトーの演説が聞こえてくる他、人々は黙って下を

俯いたまま一步、また一步と列が動くのである。

いやね、俺の知っているウマ娘世界つてのは、みんながキラキラ輝いててキャツキヤウフフしたりしてるはずなんだけど、まさかこんな事になるなんて思わなかった。

母さんの手は、ゴムのようにすっかり熱を失っていた。

母さんは、俺が産まれてはじめてのうちは笑顔を見せていたりしたが、今ではすっかり意気消沈してしまつて、他と同じように下を俯くことが多くなつてしまつた。

ちなみに、母さんいわく父さんは「お父さんは遠いところで仕事をしているの。遠い、遠いところだね……」と言っているが、まあかれこれその決まり文句を数年間も聞き続けてきた。

実質シングルマザーとして、女一人で子を支えているのである。

そんなこんなで、配給の列がいよいよ回つてきた。

やったぜ！今日はご馳走だ！そう一人キャツキヤしているのを母さんに咎められるなり、配給係の人が配給物を渡す。

それに俺は噴怒した。

黒。パン三個、卵一個、ニンジン二本、小麦、牛乳、石炭少々である。

やべーよ！これじゃあ飢え死にしちゃう！！そうぐだるが母さんは聞く耳を持たず、俺を引つ張つてその場を離れる。

「これで我慢しなさい」つてさ。

うん、我慢します。

その時の母さんの顔が、忘れられない。

さて、すっかり立場をわきまえた俺は、これ以上ひもじい思いをしないため、将来この国をパラダイスみてえな国にするべく猛勉強をするのであった。

その間、この国の情勢はどんどん悪化していくのが、群衆のピリついた雰囲気からよく分かった。党は隠しているが、間違いなくこの国は破滅の一途を辿っているだろう。

それと並行するように、ますます母さんは疲れ果てていった。

だから、俺は少しでも笑顔にしてあげたくて、母さんに対して明るく振る舞った。

学校で起きた面白い事だとか、面白い友達ができただとか、持ち前のハイテンションを活かして、出来る限りの楽しい事は尽くした。

「あなただったら、本当に元気な娘……お母さん嬉しいわ、元気に育つて。きつとお父さんも喜んでくれるはずよ」

と言ってくれた事が、一番嬉しかった。

そんな風に生活しているとき、ついに俺はトレセン学園の入学受験に合格することができた。

「お母さん見て！合格！合格だよ！！私トレセン学園に行けるんだよ！！」

と、喜びのあまり、封筒から半分出された合格表をお母さんに向けてまじまじと見せつける。

あまりの喜びぐあいにもハイテンションな俺でも流石にハツと我に帰って、自分がした突発的な行動を振り替えて赤面する。

「うふふ。おめでとう、おめでとう」

ジェットコースターかっつてぐらい感情の起伏が激しかった俺の様子を見てた母さんは、ちよつと笑いを漏らしつつ合格を祝ってくれた。

嬉しいけど恥ずかしい！

そんなことはさておき、ついに俺はトレセン学園に行ける。

しかし、残念ながら、アプリやらの舞台である日本のトレセン学園ではないので、肝心の推しはいない。

だが、かのソ連のスーパーウマ娘ことアニリンのように、共産圏でも好成绩を納めれば西側諸国に遠征することができる。

それはつまり、めっちゃ頑張れば日本に遠征することができなくもないと言うわけだ。

さらに頑張れば、留学という可能性もある。

てなわけで、俺は西側に留学できるぐらい強くなるべく、死にかけるぐらいの鍛練を

積もうと決意を固める。そして、入学のときを自主トレーニングしつつ待つのであった。

「辛くなったら戻ってきてもいいのよ？お母さん待つてるから」

「ううん、大丈夫。私は戻らない。戻ったら強くなれないからね」

「もう、あなたたつて娘は……」

トレセン学園行きのバスに乗る際、バス停まで母さんが来てくれた。

俺はバスの窓から身を乗り出して、バスが発車するまで母さんと話をしていた。

別れるとなると、やっぱり寂しい。

このままこんな時間が永遠と続けばいいのにな。なんて思うが、時というのは残酷だ。

ブザーが鳴って、ドアが閉まる。旅たちの合図である。

「お母さん！さようなら！さようなら!!」

バスはどんどん加速していく。

遠ざかり行くお母さんに対して、俺はさようならと声を大にして言う。

そして、バスが曲がり角に進んで母さんの姿が見えなくなるまで、俺は母さんの姿を目に焼き付けていた。

最後に見た母さんの姿は、涙で目が眩んでよく分からなかった。

かくして、俺は転生地の問題から日本ではなくユーゴスラビアのトレセン学園に入学することとなった。

最初は馴染めるかどうか不安だったが、案外いい感じに友達ができて、楽しい学園生活を送れている。

トレーニング設備も十分にあるから、初っぱなからそれをフル活用して、とにかく鍛えまくる。

そんなこんなで、俺は転生して以来最高に楽しい日々を送っていた。

こんな幸せな暮らしが続いたらいいなあ、なんて細やかな願いを持っていたのだが、そんな淡い希望はとある出来事をきっかけにズタズタに引き裂かれる。

なんと内戦が勃発したのだ。俗に言う、ユーゴスラビア内戦である。

よくもこんな力オス地帯に産み落としてくれたな！神よ！と、今できる最大限の愚痴を神にしてやった。

「スパシテルくん。単刀直入に伝えると、君のお母さんが空爆で死んだ」

「……………えっ?」

内戦が始まって数日後、学園の理事長であるステパン理事長から直々に呼び出された

俺は、理事長室にてとんでもない事を告げられる。

「嘘っ、いやそんな!!嘘でしょう!ねえ!こんな、いきなりっ……!」

理事長というお偉いさんを前にして、動揺を隠せないあまり俺は敬語が崩れる。

「う、ううう、うああああ……!!」

そして、泣き崩れる。

いつものポジティブフェイスの面影はどこにもない。

「……スパシテル君。お母様が亡くなってしまうことで、君の親権は今や空中にある。

これから誰に引き取ってもらうかだとかの話で忙しく——」

理事長が優しく話し掛けているそのとき、突然扉が開かれる。

「理事長!大変です!軍の者が大勢ッ——」

「なに!?軍が……くそう、まさかッ……!」

報告を受けた理事長の顔は、何か恐ろしい事を感じ取ったときのように蒼くなる。

何となく、これから何が起きてしまうのか、俺も察していた。

そのあとひと悶着ありつつも、俺らトレセン学園の生徒の大半が軍バとして徴兵されることになった。

は?え?え?!ちよっ?!これ少年兵つか少女兵(?)ってやつだよね?!これ国際法に違反してるとちやいますか?!俺達の、人権どうなってるの……

数日の間に事態が目まぐるしく変化して、もう何がなんやらワケが分からない。

せや！逃げたる！とも考えた。

だが、銃を突きつけられて訓練を強要されるので逃げれなかった。

なぜなら、逃げたら「確実に」処される（意味深）が、敵地に向かって前進すれば、”もしかしたら”死ぬかもしれないからだ。

汚い例えになるが、う〇こ味のカレーかカレー味のう〇こ、どっちか選べと言われてるも同然の、選んだところで結局両方とも行き着く先は地獄の選択を迫られたのである。

というような諸々の事情があつて、俺はこのまま訓練の道を選んだ。死にたくなかつたからだ。

「はあ……はあ……！」

ザクツ　ザクツ

俺らに課された最初の訓練は、”コース練習場を耕す”ことだった。

これが訓練???いくらなんでも屁理屈過ぎるでしょと悪態をつきつつ、作業を淡々と進める。

ラチを抜き、みんなで鋤を使って、ウマ娘の第二の母であり、俺らの夢そのものでも

ある芝を抉り返して、耕していく。

鍬やスコップといった農耕具の数は限られており、「鍬がなければ素手で耕すように」という無茶苦茶な指令に従って、素手で地面を掘り返す娘もいた。逆らったら死ぬ（直球）なので、誰もこの非効率を指摘しなかった……というよりはできなかった。

「痛い……痛いよお……」

隣で素手で地面を耕す学友が、ボロボロになった両手を合わせて痛い痛いと言目になる。

「ルツカ、これ使いな」

困ってる学友を見捨てることはできないし、痛々しいその姿を直視していたらこっちまで涙が出る。

なんとかできないかと思い、俺は手に持っていた鍬を学友に差し出す。

「えっ、でも……」

「ほら」

「でもそしたら、スパちゃんが手で……!」

しかし、学友は遠慮してなかなか受け取ろうとしない。

「ふふん、大丈夫だよ。私、手でトンネル掘れるぐらい鍛えてるからさ、心配しないで」と、俺は満面の笑みを浮かべて言う。

「う、うん……ありがとうスパちゃん」

何回か押すと、学友は押されて鍬を受けとる。

いやあ、泣きそう。戦争がなければこんなことにならなかったし、学友は手をボロボロにすることにもならなかったんだ。

戦争とはこうも日常を奪うのかと、俺は激しい怒りに奮い起ちながら、手で俺達の”夢”を抉り返していった。

そして、俺含めたくさんの学友が強制的に徴兵され、空爆に怯えつつも狂気としか言えない訓練の日々を送っていたある日、二度と忘れられない訓練が行われた。

「我らが誉れ高きクロアチア民族のウマ娘諸君、今日は君らの為に特別な訓練を組んでやったぞ」

とウマ娘の教官が言うと、そこへトラックがやってくる。

そのトラックの荷台から、ボロボロの軍服を身に纏った男7人が、お互いに鎖に繋がれた状態で半ば強制的に下ろされる。

そして、俺達の前に来て待機するようにと指示される。

「君達には、今日”実物を使った近接戦闘の訓練”をしてもらう」

ザワザワと、周りが一瞬どよめく。

男らの軍服をよく見てみると、それは敵国のセルビアのものであるということに、一部は薄々気が付いた。

「生きてはいるが、”これ”はセルビア人の捕虜だから安心してほしい」

「いやいやいや！いくら敵国とは言え、生きた人間を使うとかどうかしてる!!」

倫理観ゆるキャラかなと言いたくなるような軍の凶行に、俺らは恐怖だとか怒りだとかを通り越して啞然とする。

「そ、そんな……む、むりですよ、そんなこと……」

妙な静けさの中、一人の学友がそれはおかしいだろうと抵抗する。

するとその瞬間、いつもの不気味なニタニタ笑顔を浮かべていた教官は、顔色を白色から赤を通り越して紫色に変化させ、般若のようなこの世のものとは思えないほど恐ろしい顔つきに変化させて、雷鳴のような怒号を発する。

「このクソアマツ!! 売春野郎ツ!! 売国奴めツ!! お前らはチエトニツクの手先かツ!? 早くやれ! このクソウマども!!」

と、流れるように罵声が飛び出てくるのだ。

あまりの変貌具合に俺らは背筋がピンツとなるほど震え上がり、思わず耳と尻尾を拗ねて本能的に嫌悪感を感じる。中には過呼吸になったり、涙するものもいた。

そのとき、そこには間違いなく地獄があった。修羅場である。

誰も恐怖で膠着して行動に移せないでいる間も、教官は俺達の尊厳を徹底的に破壊するような罵声を浴びせ続ける。

その時だった。

「う、うあああ!!」

誰かが銃を構えて、跪いている捕虜に向かって突進する。

ゴツン!

「やつ! つたあ! はっ!!」

ドン! ドン! グチャ!

「べ、ベリヤーヴァ……」

俺の学友であるベリヤーヴァが、手に持つていたカラシニコフを捕虜のうち一人に対して、鋏を振るように銃床を叩きつける。

薄い皮に覆われた硬い骨と鉄がぶつかり合う鈍い音が響き渡る。

「ヤー!!」

グチャ! グチャ! グチュ!!

虫すら殺せないような優しさを持つ学友が、今日の前で、捕虜の形が変形するほどの恐ろしい暴力を振るっているその豹変した姿に、俺は動揺を隠せなかった。

戦争とは、非の打ち所がない聖人を、このような暴力装置に作り変えてしまうのかと、

俺は言葉に形容しがたい不安と怒りがドワツと湧き出た。

「ハツハツハ！すばらしいぞ、ベリヤーヴァー！こういう者こそ、戦場を生き延びるのだ！」

と、今度は満面の笑みで軽く拍手をしつつ教官は言い放つ。

「はあ…はあ…はあ…」

ベリヤーヴァーが満身創痍になって地面へたりこむと、おもむろに教官が俺たちの方を振り向いて、大声でこう言った。

「弱いと死ぬ！生きてければ強くなれ！」

と。

「ふうう…いわー!!」

「だー!!」

学友の行動に続くように、理性のリミッターが壊れたものから順に、続々と”実技”に身を投じていった。

そして、気が付けば俺も、その理性無き群衆の中にて群れていた。

その日の夜、俺らは兵舎の中で雑魚寝していた。

そこに女の子らしいプライバシーは存在しないと断言できる。

寒いときはお互いに体温を感じ合って暖を取ったり、ネズミやゴキブリといった醜悪な小さい奴らがときたま肌の上を這いずり回るような劣悪な環境で、俺たちは生きていく。

「は、は、は、あああ、ほ、本当に、殺し……ちやつたんだ。あたし、こ、この手で人、を……」

いつもならすぐにグースカいびきを立てて爆速爆睡してる学友が、今日はギンギンに目を開けている。

明らかに様子が狂っていた。

「ルツカは悪くなんかないよ……これもすべて戦争が悪いんだ……」

と俺は言つて、今日の話はしようがないから水に流すしかないとどうにかして励まそうとする。

「う、うん、そうだよね……。ちよつと気分悪いからおトイレ行ってくるわ……」

「あ、うん……」

というと、今にも吐きそうな顔色の学友はおもむろに立ち上がって、兵舎から出ていった。

立ち直ればいいなと淡い希望を抱いていると、学友が兵舎から出ていった数分後、突然

ドン!

という銃声が辺り一帯に響いた。

「え、何の音?」

と、誰かが言う。

深夜の銃撃音となると、さすがに誰も無視することはできず、ぽつりぽつりと皆は起き上がって、何が起きたのか把握しようとする。

「何をしている! 君たちは寝ていなさい!!」

と、異変を感じた教官が部屋にやってきて、困惑する俺たちを怒鳴りつける。

当の俺は、心臓がバクバクして冷や汗が止まらなかった。

それからまもなくして、学友はトイレの中で自分の口に銃口を突き付けている姿で発見されたという。

死因は、精神的苦痛に耐えられなかった自殺だった。

人を殺した罪悪感に、耐えられなかったのだ。

そして、その日を境に俺はハイテンションになった。

なんせ、そういうノリでいないと、苦しすぎる現実に耐えられないからだ。あの学友のように。

そんなこんなで、俺達は兵士になった。

今や俺達は、平和だった頃に持っていた優しさはどこかへ消え去り、換わって命が失われる事に躊躇がない、意図的に倫理観を狂わされた殺戮マシーンになってしまった。

例えどれ程時間をかけても、大多数はあの輝かしき青春時代の無垢な人格には戻らないだろう。

そして、心の奥底では、殺人者としての狂気と罪悪感に苛まれながら一生を終えることになるだろう。

戦争は、俺達に一生消えないトラウマを与えた。

それはともかく、兵士として最低限の訓練を終えた俺達は、いよいよ実戦に投入されることとなった。

セルビア空軍の爆撃で瓦礫と化した市街地で、セルビア軍を迎え撃つんだってさ。

いやいやいや、そんなの無理イ〜！つべこべ言わずにやれ！はい！みたいなコントかよ…って勢いで今伏せている。ちなみに、俺の隣にはロケットランチャーを持った同級生がいる。

改めて考えると、本当に戦場に巻き込まれたんやなって…俺、帰ったら結婚するんだ…！

だとか言つて下らないことで笑つてしていると、キヤタキヤタキヤタと言う音が街角から聞こえてくる。

あ、これ来たなつて訳でマガジンを差し込んでリロード。敵に備えます。

そして、ドライアイスみたいに舞い上がる土煙の中から突き破つてきたのは、案の定戦車だった。

フア!? ガチもんの戦車やんけ!?

ガチで引いていると、角を曲がつてこつちの方にゆつくりと近づいてくる。

戦車の後ろからは、歩兵が数名ほどぞろぞろと続いてきている事が分かった。

「今だー!」

そう戦友が言うなり、立ち上がつてロケランをぶつばなす。ロケランは見事に命中、戦車はありとあらゆる穴から火を吹くと、大爆発を起こして砲塔が吹き飛ぶ。

すかさず、ついてきていた歩兵達に向かつて、俺達はがむしやらにカラシニコフの7.62mm弾をぶちこんでやった。

すると、今度は敵の反撃ターンである。

頭上を弾丸が飛び、その度に熱を感じる。そして、近くの地面で跳弾が発生している音が絶え間なく聞こえる。

もうやだ!! 僕ちんこんなところから早く逃げたい!! 生”き”た”い!! (迫真の幼児退

行)

そう思っても、どろどろの戦局は変わらないし、平和は訪れない。

そんな泣き言はともかく、先に戦車を潰しておいてよかったな……と思いつつ、その場から撤退する。

これが、俺の初めての実戦になった。

ぶつちやけ、その時は人を殺したという感覚があまりなかった。

なんというか、案外呆気なく死ぬんだなって……あまり重大には受け取ってなかった。

この時、俺は間違いなく感覚が麻痺していた。

別の日、時刻は深夜、瓦礫で偽装した陣地で歯を磨いていると、突然空襲警報が鳴り響く。

命の危機とあらば多少の汚さを許容できるようになった俺は、ペツ！と全てを吐き出して防空壕へ滑り込むように逃げた。

キイイイーン！バリバリ！！ドォーン！！

「くそう！あいつら機銃掃射をしてきやがった！」

隊長がそう叫ぶ。そして、壕から出て目にしたものは、前世でたまにみていた花火

……

ではなく、無数の照明弾である。

……いや、これは照明弾ではない、白リン弾だ!!

白リン弾とは、簡単に言うともつちや燃える爆弾である。

これに当たると、見るも無惨なほど苦しみながら死ぬので、現場の兵士の間では大変恐れられている兵器だ。

実際に撃ち込まれた現場と戦友を見たことがあるのだが……”惨い”という単語以外に適切な単語があるのか?と問いかけたくなるような状態だった。

それはともかく、俺は大急ぎで再度防空壕へ逃げ帰る。

そして、無意識に耳がぺしゅんと折り畳まれ、あの不気味な音を聞きたくなくて、猫のように丸くなる。

冷や汗と震えが止まらなかった。

俺は、あの光景が脳に焼き付けられたのである。夜空を照らす、綺麗な閃光を……

それからと言うものの、国際法で禁止されているはずのダムダム弾を撃ち込まれたり、クラスター爆弾が投下されたりした。

また、目を追うごとに、慣れ親しんだ戦友が一人、また一人と姿を消していく。

ある戦友は地雷で、ある戦友は味方の戦車に潰されて、またある戦友は子供に騙されて粉々になった。ウマ娘だって死ぬときや死ぬんだよと、半ば自棄になって受け入れる

しかなかった。

毎日、誰かしらがいなくなつた。

「次は自分の番かも知れない」と、誰もが死ぬ恐怖に怯えてピリピリしていた。

しかし、驚くべきことに、自分の死には人一倍敏感にもかかわらず、他人の死に関しては無関心・無頓着という奇妙な心理状態に、皆は陥っていた。

衣食住足りて礼儀を知るといふ言葉の逆で、そういうのがない極限状態だと、自分が今日を生き残るのに精一杯であるが故、死生観が可笑しくなるほど冷酷になつてしまふのである。

そして、欠員を埋め合わせるように、新しい人員が補充されていった。それも、俺らよりもさらに若い子供や、おばあちゃんウマ娘が入つてきたりする。

案の定、そういう者らは訓練が不十分な状態で、損耗率がえげつないぐらい高かつた。損耗したからさらに訓練をすつ飛ばして数だけでも即補充……という悪循環に陥つていたのである。

当然、そのような状況では、俺のような歴戦の生き残りは重要な戦力と見なされており、年齢にそぐわない異例の昇進を重ねていくこととなつた。その過程で、俺は隊を率いることになつた。

一刻も早く、この悪夢みたいな戦争が終わるようにと強く念じていた。しかし、来る

日も来る日も戦闘の毎日で、そんな狂った日々が何カ月も続くのである。

もう気が狂うほど非日常なんや!! (血眼)

とてもじゃないが、ハイテンションでないと精神を保つ事ができやしない。

俺の知っているやさしいウマ娘世界、どこ…?ここ…?

そんなこんなで、現実と非現実を繰り返しているかのようなある日、突然トレセン学園の理事長代理がやって来る。

え?お前を日本のトレセン学園への留学生に推薦しただつて?

それつてつまり、留学つて名目でこの地獄から正規の手段を使って脱出できるつて訳

!?

しゃあ!!世の中捨てたもんじゃねえな!まじフヴァーラ!神様!

と、言うわけで……

逃げるんだよ〜!!!

第2話 魂の祖国、安らぎの地へ

「来ちゃった…ほんとうに…」

羽田空港の到着ロビーを歩きながら、俺は思わずつぶやいた。

俺はついに、地獄から抜け出して魂の祖国である日本に帰ってきた。

日本語があちこちから聞こえ、看板は日本語で書かれている。

ああ、日本なんだなって感じだった。

実家に帰ってきたような安心感が、ポワポワと湧いて出てくる。

「……………しゃあ！」

感激するあまり、俺は思わずガッツポーズをしてしまう。周りの目なんかまったく気にならないほど、俺は喜びまくった。

「やった…！ やつとこれなんだ！ 夢じゃないっ…！ 現実だあつ…！！」

たった一人でそうはしゃぐので、周りから視線を集めてしまい、ハツと我に返ると恥ずかしくなる。

これには、ハイテンションマンの俺でもさすがに赤面してしまい、思わず髪で顔を覆い隠すのであった。

色鮮やかなキャリアケースが所狭しと行き交うなか、さもタイムスリップしたかのようなベージュで革製の古ぼけしいトランクケース片手に、上機嫌な俺は“チトー元帥と共に”を口ずさみながら、ルンルン走りで空港の出口へ向かう。

そして、ついに……！ ついについに！

空港の外に出たことで、やっと日本の領内に入れたのである。もう、あの地獄ではないのだ！

ばんざーい！

今度は周りに迷惑をかけないようにするため、心の中でそう叫ぶ。

そして、胸元で小さくガッツポーズを決める。

もう、気が狂うほど嬉しく、あまりにも感無量で無意識のうちに熱い涙を流していた。解放された!!

その気持ちで一杯であった。

しかも、留学先がああウマ娘プリティダービーの主軸となる日本のトレセン学園なのだ。

これはもう、転生して以来で一番のご褒美と言えよう。やっと、推しに会えるのだ。やっぱ世の中捨てたもんじゃないなと実感する。生き残れてよかった。

そうこうしているうちに、日本のURR側が手配してくれた輸送車両……じゃねーわたく

クシーだ。ナチュナルに常識改変されて草と思いなから、俺はタクシーに乗り込む。流れ行く懐かしき東京の景色をぼんやりと眺めつつ、さつき”輸送車両”と先走ったことが、いつの間にか戦地の色に染まってしまったいな…と、もはや自分が”あっち側”に染まりつつあったことを少しばかり悲観する。

だがまあ、なんだかんだ留学した時点でこちらに軍配が上がるだろう。

推しのウマ娘ちゃん達を側から拝みつつ、留学期限が切れたらそのまま日本へ亡命、ダメなら日本を経由してアメリカにでも亡命しようとも考える。

そう、せっかく修羅場を乗り越えて転生したのだから、後はとにかく楽しんで逃げ切るのだ。

ちよつとぐらい羽目を外しても、あれほどの修羅の門を潜り抜けてきたのだから、神でもさすがに見逃してくれるんじゃない？と、心の悪魔が囁くのであった。

「ふああ……ちよつと疲れたな……」

タクシーのフカフカな座席によって緊張が解かれたせいか、唐突に猛烈な睡魔が訪れる。

ふとカーナビを見てみると、まだまだ距離があるみたいだった。

寝不足のまま新たな学園生活を送るぐらいなら、今のうちに寝て睡魔をどうにかした方が良いと俺は判断する。

てなわけで、俺は爆速で完全睡眠状態に移行する。

それからしばらくして、タクシーはトレセン学園へ到着する。

起きたとき、体中が冷や汗でびっしょりして俺は驚く。

きつと長い時間太陽に当たってたせいでこうなったのだろう——と、あまり深く考えなかつた俺は、ささっと汗を拭き取る。

ふと、留学祝いで貸し出された東ドイツ製の腕時計を見ると、予定の時間ピッタリだった。

運転手の運転技術に感服しつつ、手鏡を使い、崩れた髪を整える。

「つきましたよ……と」

運転手が降りるなり、わざわざこちらの扉を開けてくれる。

日本のサービスなら当然かもしれないが、東側諸国だとそもそも庶民はタクシーに乗

れないので、この思いやりに感激する。

一応、元日本人ではあるが、長いこと日本の文化から遠ざかっていたため、こういう事を忘れていたのである。

良質のアスファルトに足をつけるなり、すっかり固くなった体を解すために背伸びを
している俺を尻目に、運転手はトランクから俺の荷物を取り出す。

ポンポンと優しく俺の肩を叩き、トランクケースを差し出してくれたので、それを受
けとる。

「ありがとうございます！フヴァーラ!!」

一礼してから足早にその場を去る。

すると、運転手はにこやかに笑顔で手を振ってくれた。

些細なことではあるが、久々に心温まる経験をした。

そんなこんなで、死線を掻い潜った先にある待ちに待ったトレセン学園での生活!

からの哀れみの視線で見られる俺!なんでや?!

そのきっかけは、初日の自己紹介から始まった。

はあ:日本語を本格的に喋るのは久しぶりだから、ちゃんと自然に言えるかな:と、
俺は不安な面持ちでいた。

おトイレにある鏡を見ると、やはり顔が緊張で張っているのだ。

「落ち着け！自分。リラーツクス…、リラーツクス…」

赤子に語りかけるが如く、冷静になるために鏡に映る己に向かって語りかける。

せつかく死線を掻い潜ったのに、威圧感とかでスタートダッシュに失敗してボツチ・ザ・クラス！化するのだけは、なんとしても回避せねばならないのである。

「スパシテルさーん！準備はできましたかー？」

たづなさんが俺を呼ぶ。

「はーい！待たせてすみません！今いきまーす！」

と言つて、俺はお花を摘み終わった俺はトイレから出て、たづなさんの斜め後ろの位置をキープしてついていく。

ともあれ、ついにアニメだとかで見たあの廊下を歩いている。

もう！尊死してしまう（迫真）！と、俺の心は限界オタクと化する。

「こちらが教室です」

たづなさんが止まり、扉を指差す。

大丈夫かな？自分の顔、笑顔を作れてるかな？

などと小粋な心配をする。

さあ！扉に手を当てて、いざ！尋常に！！

ガララッ！

「……………」

うわつみたいな引いた感じで俺を見てくる。

もう、なんだよ……

だがしかし！このどんよりとした空気を、この後の自己紹介コーナーで挽回してみせる！

それに、よく見てみたら、ヒシアマゾンとナリタブライアン、それに加えてサクラローレルがいるではないか！

シヤア！推しがいるのならめっちゃ頑張れるぜ！と、俺は自分自身を鼓舞する

先生が一通り俺の事を紹介するなり、自己紹介コーナーに入る。

俺が「遠慮しなくて良いんだよ、どんな質問にだって答えるよ」と気軽に話しかけてくれるよう促すが、皆カ○ジみたいにならないうわつみ ざわ ざわ ざわ なるのだ。

やばいよ、明らかに危険視されてる！

「私の名前はスパシテルなので、気軽にスパちゃんって呼んでくれれば、いいかなあ……………」

「……………」

誰も質問してくれない状況に嘆いていると、なんとヒシアマゾンが元気よく「はい」と

言って手を挙げるので、先生はどうぞと言う。

「好きな食べ物はなんだい!？」

来た来たあ……!ド定番中のド定番ともいえる質問、”好きな食べ物は何か?”が飛び出てくる。

アマさん突破口を開いてくれてありがとう!と心の中で感謝しつつ、俺はほんのちよつとウキウキになって答える。

「はい、そうですね……うーん……私は……」

と、絶対に答えなければならぬ肝心な時に、これだ!となるものが思い浮かばないというまさかの危機状態に陥る。

マズい!ここで詰まったら、メイクデビューに失敗しちゃう!なんとかしなきゃ!と、どうにかして頭をフル回転させて答えを導こうとする。

「…お肉が好きでしたね」

肉が好きだと答えると、教室の奥の方であんまり興味がなさそうにしていたブライアの耳がピクツと反応するなり、さつきと比べてほんのちよつと真面目な面立ちでこつちを見つめてくる。

「へえ〜!肉が好きなのか!じゃあ、どんな肉が好きなんだ!?!」

推しの気を引けてやったあ!と思っていると、さらに追撃を掛けてくる。

油断していた俺は、素でとんでもないことを口走ってしまふ。

「腐ってなければ…」

「え？」

補給が途切れがちだった戦場では、とりあえず食にありつけるだけでも十分幸せだった。

ひどいときには、そこら辺の葉っぱや腐った肉（例えば、捕獲したネズミや撤退の際に放置された肉類）を食べなければならなかった時があるので、最低限、腐っていなければ十分だと俺は考えていた。

「…？」

一瞬、なんで質問した人が困惑しているのかよくわからなかったのが、自分の常識を疑って発言を見直すと、自分の発言の意味がここの常識と微妙にずれていておかしいという事に気が付く。

「あ、や…新鮮なお肉であれば、なんだって行けます。だって、美味しいんですから（ゴリ押し）」

と、俺は何とかして誤魔化そうとするが…

「なるほど！確かに、肉は新鮮なうちが一番旨いからな！」

アマさんは機転を効かせてフオローしようとする。が、他の皆は違和感を感じ取って

と言った瞬間、突如として”あの頃”の楽しかった日々の記憶が走馬灯のように脳内に溢れる。

—ウマ娘の友達と一緒に、街を一望できる丘まで駆けっこしたとき—

—町の外れを流れる小川で、魚を手づかみでとれるか挑戦したとき—

—トレセン学園へ行くと決まった際に、母と大喜びしたとき—

—学友と一緒に、大人になったらこんな事がしたいと盛り上がったとき—

そんな、冷たく辛い日々の中において確実に存在した楽しかった出来事が、温かいお湯のようにポワポワと湧き出てくるのだ。

懐かしい、あの頃に戻りたい、という焦燥感に心が焦がされて、ほんの一瞬だけ涙が溢れそうになる。

転生して以来の人生ははっきり言ってクソみたいなもんだったけど、それでもこれまで生きてきてよかったなと思える出来事は確かにあったと俺は思い出す。

たまにはいいことがあるのだ。

さて、先ほどとは違って、今度はたくさんのバリエーションがあるがゆえにかえってすぐに答えが出ない状況となってしまう。まあ、さつきと比べれば断然マシで、むしろ嬉しい悲報まである。

「…国土の東にある、周りを農園に囲まれた小さな町です。自然と調和した麗らかな景

色がすごくいいので、是非とも皆さんに見てもらいたいところです。それに加えて、ご近所さんがみんな——」

「いい人」と言いかけた瞬間、自分の意思に反して言葉が詰まる。

それから間もなくして、また”あの”冷や汗と震えに襲われる。

ぽつりと、腕から滴ってきた大粒の汗が床に落ちて、飴玉ほどの大きさの水たまりを作る。

話を進めなければならぬのに！と強く念じても、無意識のうちに強く入る顎の力に跳ね返されて言葉が出ない。

脳の奥底から、”思い出したくないあの光景”が突然浮かび上がる。

もしもいま目を瞑れば、より鮮明にあの光景が映し出されるだろう。悪夢の強制視聴という訳だ。

それを避けるため、乾く目をどうにか堪えて必死に目を閉じないように最大限努力しつつ、見たくない記憶を遠ざけるために、楽しいことを思い浮かべて記憶をかき乱そうとする。

たのしかったことたのしかったことたのしかったことetc……

いろんな楽しかったことをとにかく思い出して、迫りくる悪魔を追い払おうとする。

しかし、そんな努力は無駄だと言わんばかりに、楽しい思い出がどんどん炎と死臭に

包まれていく。

発狂しかけたその時だった。

「スパシテルさん？」

と、先生に肩をポンと叩かれる。

「はいっ！」

肩を叩かれた瞬間、それでの呪縛が一気にほぐれたように、体の自由が利くようになる。

また、嫌な記憶も煙に巻いたように吹き飛んだ。

その反動と言わんばかりに、「はい」と言った瞬間、背筋をピンと伸ばす直立不動体勢になるとともに、両足かかとをカツと音を立ててくつつつけてしまう。

つつい、軍隊的な行動をしてしまった。

それらに加えて勢いそのまま敬礼までしていたら、ほとんど兵士と変わらない姿勢になつてただろう。アブねえくギリギリサーフと、俺はいったん安心する。

「…皆さん、もう一度聞きますが、質問はないという事でよろしいのですね？」

と先生が皆に向かって聞くと、各々が「無いです」と答える。

返事の具合を確認すると、先生はこちらを振り向く。そして、先生はとある空席を指さしながら話をする。

「では、スパシテルさんはあそこの空席に座ってください」

「はい、わかりました」

と、今度はおしとやかに言う。

あああ…終わった…いろんな意味で…と、俺は意気消沈しながら席に座る。

もうだめだあ、おしまいだあと悲観するものの、世の中は言うほどクソツタレという訳ではない。

辛抱強く耐えて、生きていけば、なんだかんだ幸福は向こうからやってくるものだ。

「よっ…スパシテル！アタシはヒシアマゾンだ。あんたがこれから住む寮の寮長だよ」

休み時間になると、俺の席と程近いヒシアマゾンが、俺のもとにやって来て挨拶をする。

「Pozdrav…ゴホン、失礼。改めまして、こんにちは。私の名前はスパシテルとい
います。以後、お見知りおきください…」

と、前世の経験と再勉強した日本語の知識をフル動員して、初対面なのでできる限り丁寧な言葉遣いをしようと心がける。

すると、二カツとした笑顔から一変して、ヒシアマゾンは一瞬だけ驚いた表情をする。

あ、対応ミスっちゃったかもしれないねえ…と俺が選択を後悔するよりも早く、ヒシアマゾンのもと笑顔に戻るとともに、小笑いしつつ話を切り出す。

「はっはっは！なかなか堅苦しいねえ。やっぱり、緊張しているのかい？」

「…はい」

「うんうん、やっぱり…。アタシもね、実はアメリカ生まれ…つまり外国出身なんだ」

「そうなんですか…」

と、俺は相槌を打つ。

史実のヒシアマゾンは、アメリカで生まれて日本に持ち込まれた——いわゆる“マル外”という競走馬だ。

ここら辺は史実通りだという事を、今後役立つかどうかはわからないが俺は把握する。

そんな史実周りの話はさておき、ヒシアマゾンは懐かしむように話を続ける。

「ここに来た初めの頃は、今のスパのように緊張しっぱなしだったよ。でも、そんな時、あそこの席に座るブライアンが話しかけてくれてね。それから仲良くなつて、今じゃすっかり親友ってわけさ！」

そう言つて、ヒシアマゾンは俺の隣に座るウマ娘を指し示す。

「よお……」

「い、こんにちは…」

将来怪物と呼ばれる三冠ウマ娘の気迫とも言うべきなのか、滲み出るギラついた気迫に押されて、俺は思わず畏縮してしまう。

「まあ、あいつはちよつと変わつてるところがあるけどね……」

「ははあ……」

とへなちよこな声をあげる俺に対して、ヒシアマゾンは続けて話す。

「ああ見えても、根はいいし面倒見がいい奴だから、仲良くしてあげてほしい。それと、ここみんなはいい人だから、きつとすぐに仲良くなれるだろう……あと、困ったことがあつたら何でも相談してくれて構わないからね。なんせ、アタシは寮長だからね！」

話を言い終えると、ヒシアマゾンはドヤツと決めポーズと決め顔をする。

「ふふつ…頼もしいですね」

「だろう!!」

「うっ、はっはっは!」

とどめと言わんばかりの念押しに、俺は思わず笑いを堪える事ができずに笑つてしまふ。

明るくて皆から慕われている姉貴分の寮長……そんなヒシアマゾンが、今日の前にいる。

生きていて良かった。そして、これからの生活に希望を持ってそうだと、俺は思うのであった。

「それじゃ、寮長もとい新天地の友達として、アタシがこのトレセン学園を案内してあげよう」

芝居がかりで笑いを取りに来る言い方で、ヒシアマゾンはここに来たばかりで土地勘が掴めてないであろう俺を案内してあげようとする。

「ええ、寮長、お願いします」

と、俺は提案を受け入れた。

「よし、任せときになーあつ、そうだ……ブライアン！」

何かを思いついた仕草をした後、俺の横に座るブライアンに向けて話を振る。

すると、話を振られたブライアンは、まあ当然っちゃ当然のことだがこちらを見る。

「ブライアンも一緒に回らないかい!？」

どうやら、ヒシアマゾンとブライアンの二人体制で学園の案内をしようという算段のようだ。

「私が学園の案内……まあ、アマさんが言うのなら、私もやろう」

「本当かい?! ありがとうブライアン! やっぱりあんたは頼もしいよ! ……それじゃあ、人員が揃ったところで、レッツゴーだ!」

最初のうちはあまり乗り気ではなかったものの、ヒシアマゾンの頼みとあらばと両者の濃密な信頼関係を鑑みれるやり取りを間近で見ている俺は感銘を受ける。

かくして、学園の案内が始まったのであった。

「ここは図書室で」

「ここはスポーツジム」

「ここは屋内プールだ」

図書室といった学校の基本的設備のほか、スポーツジムなどといったアスリートを育成するトレセン学園ならではの設備が充実している様子に、俺は「はえーすごーい」と驚く。

それら以外にも、屋外ライブ場や巨大なトレーニング用のレース練習場など、圧倒的な財力がなせる巨大な育成設備にこれでもかと驚きに驚きを重ねつつ、ヒシアマゾンの丁寧な解説と補足説明のブライアンという息ピッタリなダブル解説体制のもと、順調に施設を回っていく。

「これは大樹のウロだ。あの穴に向かって叫んで気分をスッキリさせてるヤツがたくさ
んいるんだよ」

「私も何回か叫んだことがあるな。」肉を食いたい”つてね」

「やっぱりあの声はブライアンだったのかい！」

「ふっふっふ、そうなんですか」

二人の仲が良いやり取りにほほえましい気分でいると、ヒシアマゾンがこちらを見て、話を切り出す。

「スパ、試しにやってみるかい？」

と、ヒシアマゾンが提案するのだ。

「わかりました。やってみます……」

なら、お言葉に甘えて……と言わんばかりに提案に乗った俺は、両手でウロのわきがあつしりと掴んで構える。

そして、限界まで大きく息を吸い、心を落ち着かせるために少しだけ息を止めて溜めたあと、すべてを吐き出す土石流のような勢いで声を張って、想いを主張する。

「みんなと仲良くしたいです!!」
と。

心の底から信頼できる人が一人でもいれば十分……なら、たくさんの人とお互いに信頼し合えれば、もつともつと希望のある人生になるだろう——そんな理由と想いを込めて、俺は声を張ったのであつた。

その後、ヒシアマゾンとナリタブライアンの案内のもと、俺は食堂へ向かう事になった。案内ついでに昼飯を取ろうという算段とのことだ。

壁に貼ってあるチーム勧誘ポスターが、本当にアニメで描かれているものと同じなことに俺はびっくりすると共に、改めてちゃんとウマ娘世界に転生したんだなと生を実感する。

そして、おぼん片手にいざ出陣！そしてメニューの多さに驚く!!

たまげたなあ……こんなにも色鮮やかな食材を見たのは久々だよ……と、俺は圧巻される。

自由経済が生み出すバリエーションの豊富さに驚きつつ、前世の記憶とヒシアマゾンのアドバイスを頼りに日本風の食材を選んでいく。

ちなみに、ブライアンのアドバイスは「肉だけで十分」というあまりにも脳筋すぎるスタイルだった。

そんなことはともかく、俺は仕上げにニンジン一本を取り、それを大胆にハンバーグにぶっ差す。冷静に考えなくてもお行儀が悪い行為であるが、ナリタブライアンをはじめとした食堂にいるウマ娘は「これ常識やで」と言わんばかりにハンバーグだとかにぶっ差したりしているので、なんら問題は無いはず。

ちよつと選びすぎたかな？まあ、ここに来るまで軽食位しか食ってないし、ウマ娘の

胃袋なら大丈夫だろうと高を括る。

そして、現世で一番重くなつたおぼんを持ちつつ、誰も座っていないテーブルを探しだし、三人揃つてそこに座る。

「いただきます……!!」

”いただきます”と言うのもいつぶりだろうか。

外国では、いただきますに相当する言葉が思い当たらなかったので、”いただきます”をする機会なんて滅多になかつた。

なお、俺の場合は戦場で”命をいただきます”していたのだが、これはとても笑える話ではない。

ともあれ、箸にまだ慣れてないのでフォークとナイフを使いながら、久しぶりに日本の食べ物を食べる。

「うますぎかあ……!!」

よく噛んで飲み込むと、あまりの美味しさに口を噛み締める。

いや、俺自身としては極めてごく普通のレシピで挑んだはずなのだが、久々にありつめた普通の食事が、胃と脳にはたまらなく感じるのであろう。

普段から最低限まともな食生活にありつけていた事に感謝しつつ、汚れきつた涙をポロポロと流しながら、食の幸せを噛み締める。

「うまつ……うまい……うろう……！」

「おお、すごい食い付きだねえ……」

まず始めに、程よく脂が乗った焼き魚を食べる。

その瞬間、間違いなく脳汁がドバーツ！と溢れた。

あまりの旨さに頭がどうにかなりそうだった。

その後は米と焼きジャケを交互に、時々味噌汁の具材を食べる行程に挟みつつ食べる。

そして、旨いものを食べてるといふ罪悪感と幸福感のシャトルランを繰り返している内に、俺はあつという間に食器を平らげた。

「あの、おかわりって許されているんですか……？」

まだまだ俺の腹は満たされない。

申し訳なさそうによそよそしくしながら、ヒシアマゾンとブライアンにおかわりをしてもよいか問いかける。

「もちろん！」

と、ヒシアマゾンが満面の笑みを浮かべて返してくれたとき、俺は思わず「やった！」と小さく声を上げた。

そして、俺はもう一度食材を取りに行く。

ああ、ここはなんて素晴らしい場所なんだ。

生きてるって素晴らしい、平和万歳——と、俺は心の中でこの至福の時間を賛美する。
これから訪れるトラウマと隣り合わせの日々などつゆ知らずに……

「う……ぐっ……はあ、はあ……」

秀雄はフロントミラーに映る客の姿を見て、不安な気持ちで頭が一杯になる。

さつきから客はずっとこの調子だ。

とんでもない悪夢に魘されているであろうことが、苦悶を浮かべる表情に、ジタバタと動く四肢、異国語の寝言から察せられた。

タクシードライバーという職業上、仕事終わりのキャバ嬢や酔いつぶれたサラリーマンなど、車内で寝る客というパターンは数えきれないほど体験している。

だが、今回は違う。

今まで見たことのないほど魘されているのだ。

「お客さん、大丈夫ですか……」

赤信号に引つかかって一時停車を余儀なくされたとき、秀雄は後ろで罵られる客に話しかける。

「Ubi jime: ha a: ha a: pitati:」

「あの一、病院……」

「Ne želim više zadržati jstvo!!」

脳から喉元へ一気に突き出てくるような絶叫に、秀雄ビクツと飛び上がり、背筋が一瞬だけ固まる。

恐る恐る後ろを振り返って見てみると、客はまだ寝ていた。

いや、魂の叫びをもってしても、現実世界に戻れなかつたと表現した方が適切かもしれない。

客の方を見て呆気にと取られていたが、ふと我に返る。

見てはいけないものを見てしまったような気がして、罪悪感に近いものを感じる。理性、又は良心がそのような倫理運動をするように働きかけたのだ。

秀雄は思わず元の姿勢に戻って、何食わぬ顔をしていつも通りの仕事の姿勢になる。

信号は青になり、前にいた車もすべて進んで、いよいよ自分が進む番になった。

ゆつくりとアクセルを踏んで、それ相応の勢いでエンジンの唸りが増し始めたとき、

秀雄は頭の中が真っ白だった。

客が起きたとき、どのようなアクションを取るべきなのだろうか、と…

目的地が間近に迫ったところ、いつの間にか客は起きていた。

涙も冷や汗も、目に見える範囲ではすべて拭き取ったようで、どこか儂い美少女な面持ちに戻っていた。

「つきましたよ……と」

学園の駐車場に止まり、トランクから客の荷物を取り出して渡す。

「ありがとうございます！フヴァーラ!!」

苦悶を露わにしていたあの表情からは想像できない爽快な笑みを浮かべて、客は元気よく感謝の気持ち伝える。

そして、やや離れたところで手を振る緑の服を来た学園の職員と思しき人のところへ走って行ってしまおう。

「行っちゃまった……」

秀雄は釈然と立ち尽くす。

思いの外あつさりと目の前から居なくなってしまった。

特に問題が起こらなくてよかったという安堵感と、自分には苦しむ客に対してやれる

ことがあつたんじゃないかという罪悪感、後悔に近い不安感が、頭の中でグルグルと駆け巡っていた。

しかし、どれほど考えても、適切な考えは出てこなかった。

ドクドクと心臓の鼓動音が増してきたとき、気を紛らわせようとカーラジオをつける。

『——我々取材班は今、ハンガリーにある旧ユーゴスラビア諸国民の難民キャンプに訪れています。現在、見てわかるように、難民はテントを張って——』

その瞬間、秀雄の頭の中に浮かんでいた様々な疑問が、点と点が線になって繋がる。

秀雄は言葉が詰まって、ただひたすらにユーゴスラビアの惨状を伝えるカーラジオを聞く他なかった。

第3話 故郷が追いかけてくる!!

日本に帰ったらやりたいことが何個かある。

そのうちの一つは、「ちゃんと整備されていて、程よい暖かさの風呂に入る」ことだ。いやあ、ついこの前まではくそ熱いわ冷たいわで0か100しかない湯加減のドラム缶風呂で我慢していたから、寒い外気に晒されないうえ、ドラム缶の直径57cmよりも圧倒的に解放感のある大浴場の風呂がたまらない!!

そして何より! 推しのおp:…っと、紳士たるもの、これ以上述べてはならない。(冷静)

「ああ〜最高だ……」

あまりの健全的な気持ちよさに涙が込み上げてくる。

生きていて良かったと、心の底から安堵する。

そんなこんなで、久々にまともな風呂を堪能する。

本当は一時間ぐらいはこのまま湯に浸かれる自信はあるのだが、のぼせかねないと、本能的に早く風呂から上らなくてはならないという強迫観念に押されて、僅か数分程度で風呂から上がる。

そして、服を着替えて広間へ向かう。

俺よりも先に上がったウマ娘ちゃん達が鏡の前でドライヤーを使って髪を乾かしているのを傍らに、扇風機の前にあぐら座りで涼しい風を浴びる。

目を瞑って、ただひたすらに風を感じる。

口を開けて涼しい風を取り込んだりして、ささやかな平和を享受する。

そんな、しょうもないけども堅実な至福の時を過ごしていたが、さすがに飽きた俺はよっこらしょーいち（激マブ）ってな感じで立ち上がり、良い感じに眠気がしてきたのでそのまま部屋に戻ろうとした。

その時、後ろから不意に話しかけられる。

「あれ？スパ、髪乾かさないのかい？」

振り替えると、そこにはドライヤーを片手に持ったヒシアマゾンが椅子に座って、背もたれに胸をくつつけて俺を不思議そうに見つめていた。

「寮長…私には髪を乾かす習慣は無くて…それに、めんどくさいですし…」

そもそも自分の髪型は短髪なので、何もドライヤーで乾かす必要がないと考えていたのだ。

端からみれば、年頃の乙女にも関わらず、ずいぶんとぶつきらぼうだと感じるだろう。

「えー!?もったいない！せっかくスパの綺麗な青鹿毛がボサボサになっちゃうよ！」

端から見てもそのようだ。

ヒシアマゾンには、俺が自身の髪を乱雑に扱ってきたことが分かるなり、目の前に珍獣が飛び出てきたかのように驚く。

だがこれには理由がある。

戦場において、特にナイフを振り合うような格闘戦では、相手にどこかしらを掴まれば主導権を奪われ、死が実質的に確定する。

その弱点こそが、髪なのだ。

故に、敵兵に掴まれないようにする為に、髪を短くしておくのである。

「ほらほらスパーク・アタシが整えてあげるから、こつちに来てー!」

ナイフを振りかざしていた時の感覚が蘇りかけたそのとき、ヒシアマゾンに呼びかけられて現実世界に引き戻される。

ヒシアマゾンは寝巻の短パンのポケットから櫛を取り出し、それを片手に手招きをすすめる。

「あ、ありがとうございます……!」

言われるがまま、ヒシアマゾンの元へ行く。

ヒシアマゾンはイスから立ち上がり、ここに座つてと言うので、そのイスに座る。

髪の状態を把握しているのだろうか? ヒシアマゾンは優しい手つきで俺の髪を撫で

る。

「これから見違えるぐらい髪がサラサラになるよ」

と、ヒシアマゾンはこちらから起きる魔法のような展開を仄めかす。

これから寮長の手によってどのような変化が起こるのだろうと、そのような好奇心を抱いた周りの人々の視線が集まる。

熱い視線を浴びながら、ヒシアマゾンは櫛とドライヤーを器用に使い使い分けて、俺の髪を梳いでいく。

はわわわ（尊み痺撃）！い、今俺の髪を！推しが触ってる！！

もう！気が狂うほど嬉しいんじゃ！しかもヒシアマゾン！！

この上ない：：幸せ！！

スウー：：ハアー、よし、スッキリした、とりあえず落ち着こう。

一回頭を冷やさなければならぬ。

そんなこんなで、ヒシアマゾンの神の手により、俺のボロボロな髪の毛は生命を取り戻したかのように、みるみるうちに綺麗に整えられていく。

推しに整えられているだけでも幸せなのに、こんなにもきれいな髪に戻って大変喜ばしい！

「できたよー！」

ヒシアマゾンには仕上げが終わったと元氣よく言う。

「……ありがとうございますっ!」

自然と、意識せずともありがとうという言葉が口から出る。

人の優しき、温もりというものに、俺は大いに感激する。

「いいのいいの、だって、アタシとスパは友達だろう? これからも、ずっと仲良くやっていこう」

ヒシアマゾンは、まるで母親のように優しく俺に語り掛ける。

俺はもう限界だった。

目元が熱くなる。

「寮長は……本当に優しい人ですねっ!」

幸福の絶頂に達してしまった俺は、嬉し涙が込み上げてくる。

泣いてる姿を見られたくない——という恥ずかしさからバツと立ち上がり、「ありがとうございますございましたっ」と、急ぎすぎるあまりやや力みながらも再度感謝の意を伝えると、そのまま自室へ駆け込む。

ちなみに、基本的にこの学園の寮は一部屋につき二人というのがスタンダードなのだが、この部屋は俺一人しかない。

つまり、この部屋の入居枠が埋まるまでの間、実質俺の一人部屋という訳で……要は

プライベートという面をあまり気にしなくていいのである。やったぜ。

そんなことはさておき、すでに月は空高くに登り、眠気が凄まじいことになる。

良い夢みれると良いなあ、たくさんレースに出たいなあ、もつとヒシアマゾン達と仲良くなりたいなあ……と、これから始まるであろう学園生活に想いを馳せながら、俺はうとうと眠りこけるのであった。

「スパちゃん！スパちゃん！」

「ふあ……?!」

ああ、もう時間が来たのか。

夜間歩哨は厳しいぜ。まともに寝れないし、寒いわ熱いわでキツイし、もうとつとこの戦争が終わってほしいもんだ。

A Kを持った学友が俺の手を引いて起こしてくれたので、自分も銃を取り、いざ瓦礫の陣から出て周辺の警戒に向かう。

「いやあ、眠いわあ……」

「もう、我慢しようよ」

「あい……」

無愛想な会話でもして眠気を紛らすが、やはりあくびが出てしまう。

その時、セルビア軍占領地域の方から、照明弾が上がった。

「ひゃあ…、すつごい光ってる…」

夜なのに、そこだけ昼のように明るくなるのだ。

幸いにも、今歩いている所はビルとビルの狭い間なので、敵に見つかる事は無いだろう。

特に気にも止めず歩いていると、先行している学友が歩きながら言う。

「ねえ…、スパちゃん。そう言えば今日、白リン弾が投下されたよね」

「うん、あれは確かに酷かった…」

そう答えると、学友は突然歩みを止める。

「あ」

ここで俺は恐ろしいことにやつと気がついたのだ。

この学友は、既に“戦死”している筈であるという事を…!!

二度と思い出したくなかった事実を思い出すと、身の毛が反り立つような思いをす
る。

「私の顔、どうなってるの？」

い、いやだ！やめてくれ!!

「くうッ……!」

学友が振り返った瞬間、首を絞められているときに、無理やり声を出そうとしたときみたいな変な声を出して起き上がる。

「はぁ……はぁ……はぁ……!」

首筋に変な感触があつたので反射的に触ると、それは冷や汗だった。

それから間もなくして、首だけではなく体の至る所で冷や汗が滴っているという事に、ようやく気付く。

恐ろしい夢を見た。

…いや、忘れようとした記憶が不意に蘇ってしまっただけか。

もしかしたら、学友は「私たちを忘れるな」と警告しに来たのか…?

おまえだけ平和な日常に戻るなどでも言うのだろうか？

もう…なんなんだよ…戦場の女神は俺に平和な暮らしさせないつもりなのかよク

ソツタレめと、俺は肩を落としてげっそりする。

結局、日本に来てても罪の意識から逃れることはできない——そんな、たくさんの戦友を置いて脱兎の如く平和な地に逃げてきた自分に対する、これから起こる報いの日々を感じさせる出来事であった。が、この時の自分は、そのことにまだ気づいていなかった。「ああもう……なんで……!」

たまたま生き残ってしまった俺に対して何を求めるんだよ。訳が分からない!!と、俺はむしゃくしやする。

そうだ!こんな時こそ深呼吸だ。気を落ち着かせるんだ!

息を吸って……吐いて……。また吸って……吐いて……

つてのを何回か繰り返すうちに、俺は心の落ち着きを回復することに成功する。

いや、正確に言うくと、自分は今冷静であると自己強迫をしているような状態……と表現した方が適切だろう。

震えが止まらない。

決して寒い訳じゃない。

なんなら、いつもの癖で毛布に全身包まって寝ていたせいで、ムワムワと蒸し暑いものである。

だが、震えだけが止まらないのだ。

「ふー……はー……ふー……はー……」

荒い息遣いが、暗闇の中で透き通るように響く。

目に見えない脅威から身を隠すかのように、俺は無意識のうちに毛布から肌を露出しないぐらい厚く包まる。

目はガンギマリ状態になって、眠気は跡形もなく消え失せる。寝てしまつたら、またあのような恐ろしい夢を見てしまうかも……という恐怖だけが今残っている。

こんな状態で寝れる訳がなかった。

カチっ カチっ カチっ

なにも聞きたくない、感じたくないと念じれば念じるほど、時計の針の音が徐々に大きく聞こえてくる。

カツカツカツと、まるで兵隊の行進のように均等な間隔が、機械的な不快感を醸し出す。

「……！」

限界の境地に達したその瞬間、気がどうにかした俺はバツと毛布を床へ投げ捨てる。

ソワソワと、蒸し苦しい空間から解放されたとき特有の涼しい空気感に体が包み込まれる。

心なしか、この涼しさと共に俺の過熱された心も冷えていく。

「すうーはー…すうーはー…」

再度深呼吸をして、今度こそ俺は冷静さを取り戻す。

変な時間に起きてしまったと、現実には直面して気が滅入る。

二度寝できるほどの眠気はもうないし、かといって朝まで起きるには微妙に時間があるといふ、何とも微妙なタイミングであった。

寝るか、起きるか。

二つを天秤に掛けた結果、眠気が来るまで起きるといふ、両者の中間案を俺は選択する。まあ当然つちや当然の考えに移ったと思う。

さあ、そうと決まれば暇潰しタイム!

ベッドの下に置いておいた革トランクを引っ張り出し、中から本を取り出す。

適当な小説でも読んで時間を潰そうという訳だ。

ただ、戦争とか言う暴力装置に人権さえも奪われた俺が、そのような贅沢品を今日に至るまで無事に所持できる訳がない。

今手元に残っている本は、ここに来て初めて支給されたものを除けば、クロアチアトレン学園時代の教科書しかない。

教科書には、ユーゴスラビアの歴史だったり、チトー元帥の偉大さや、民族の団結がどれほど尊いものなのかといったものが載っている。

そういった思想面以外にも、イヴォ・アンドリツチ等の文芸モノも取り扱っていたりする。

よく読んでみると案外色々なものを取り扱っており、面白い。

だから、教科書でも十分楽しめるのだ。

てなわけで、娯楽書物？が教科書しかないので、さっそく教科書を読んで眠気を待つ。

〔P o j e d n a l j u b a v , j u t r o , u t u i n i , d u š u n
a m u v i j a , s v e t e š n j e , b e s k r a j n i m m i r o m p
l a v i h m o r a , i z k o j i h c r v e n e z r n a k o r a l a ,
k a o , i z z a v i j a j a — 〕

国語の教科書に載っている詩を読んでいる最中、廊下の方からきしきしつと、微かに床が軋む音が聞こえてくる。

足音だ！と、直感的に理解する。

思考を展開するよりも早く、音を立てないように体を伏せ、毛布を顔を少し出す程度に覆い被る。

息を殺し、目と耳と神経を最大限に研ぎ、音の具体的な情報を分析する。

—西から一人、距離20mあたり。何も持たずに裸足で歩いている—

という事を、脳内に保管してある膨大なデータから計算し、極めて正確に導き出す。

静かに息を吐き、吸う。すると、体温と毛布で温められた蒸した空気が入る。普通なら暑くて不愉快な気分になるが、そうはならなかった。

死ぬかもしれないのだから、そんなことを悠長に気にするわけがないのだ。ハツと、またもや我に返った。

ここは戦場ではないのだから、自分を殺す敵兵なんていないのだ——と。

そう思うと、途端に扉の向こうにいる人物に対する警戒心が薄れる。

警戒心が衰退すると、どういうわけか誰かと話したいという、甘えの気持ちが入る。今の状況を誰かに吐き出して、楽になりたかった。

話せなくてもいい。

味方を目撃して、平和な日本にいるという確証を得ることで穏やかな日常を今過している実感したい。

とにかく人に会えればそれでよかった。

たとえそれが寮長で、規則違反がバレて懲罰されることになってもそれでいいのだと、気が動転して冷静な思考が難しくなっていた俺は判断した。

ガチャ、スーとドアを開ける。

「……っ！」

そこに立っていたのは、ピンク色の桜柄のパジャマを着たサクラローレルだった。

「びつくりしたよ。スパ…ちゃん」

ローレルは相当驚いたようだった。

普段の凛々しくも儂い雰囲気顔つきからは想像できないほど目をぎよつと見開いて、唇に力が入ったように顔を強張らせる。典型的なビツクリフェイスだ。

月明かり以外に光がない暗い空間でも十分に理解できるほど、驚愕していた。

悪いことをしてしまったと、恐れおののくローレルの顔を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「あ…ローレルさん…。驚かしてごめんなさい…」

ローレルは、俺の謝罪を聞いた瞬間に肩の力をストンと抜いて普段の凛とした顔つきに戻り、優しい微笑みを見せる。

「その…なぜだかドキドキしちゃって寝れなかつたんです。そこへたまたま足音がしたので…」

孤独感を紛らわすために、誰かに会いたかった——と言葉を続けようとした。

だが、プライドのようなものが喉元に引っかかって、言葉がそこから先に続かなかつた。

妙な静寂が空間に流れる。

気まぜい雰囲気だ。

しかし、静寂に紛れるようにローレルは小さく「なるほどね」と呟く。

幸いなことに、ローレルは俺の意図をなんとなく察したようだった。

俺はホツとする。

「ねえスパちゃん…よかつたら、今から私と一緒に夜更かし…しない?」

ローレルは人懐っこい笑顔を浮かべながら、俺を誘う。

規律違反がバレて処罰されるリスクと、友達と親睦を深めるといふ二つを瞬時に天秤に掛けた結果、俺は

「うん」

と答える。

超えてはいけないラインを越えたとき特有の鼓動と高揚感、或いは罪悪感が、心の奥から徐々に湧き上がる。

だが、悪くはない心地だ。

彼女はほんのりはにかみながら教室に入ってきた。

黒髪のボブ。どこか世界の理を見通すような冷めた顔つきに、蒼い眼。アスリート特有の、スラツとしたスリムな躰。

ああ、クールな感じの人なのかなと、それがスパちゃんに対する第一印象だった。

「私の名前はスパシテルなので、気軽にスパちゃんって呼んでくれれば、いいかなあ……」

スパちゃんの言葉を初めて聞いたとき、その日本語力には驚いた。

彼女は外国人で、つい最近日本に来たばかりだ。

にもかかわらず、彼女の日本語力というのは、生粋に日本人が話すレベルだったのだ。特にこれと言った訛りなどはなく、日本人のそれとほぼ同等に日本語を流暢に操る。

順当に周囲の質問に応えていく最中、私はスパちゃんの努力を想像して呆気にとられていた。

「腐ってなければ……」

「え？」と、周囲につられるように私の口から漏れる。

明らかに質問と不釣り合いな回答に、私は想像の世界から引き戻されて、今日の前にいる、或いはある現実に視線を注視せざるを得なかった。

腐ってなければ……それはつまり、腐った肉さえも食べなきゃいけなかった状況だったってこと???

自分の頭の中で、その答えに至る地獄のような場面が浮かび上がってしまい、それに感化されて動揺を隠しきれなくなる。

スパちゃんが次のどのような発言をするのか、私は固唾を飲んで見守るつもりだった。

しかし、様子が明らかにおかしかった。

なんとなく苦しいように口をパクパクと動かすが、声にはならない。

言葉が詰まっているのは明白だった。

まずい!

私は咄嗟に判断した。

固まった歯車を動かすためには、潤滑油を注がなくてはならない。

スパちゃんが固まっている今、私はどうにかして場面を切り開こうと、機転を利かす。

「スパちゃんの生まれ故郷はどこなところなんですか?」

私はスパちゃんに質問をする。すると、一瞬だけ私の方を見て、「助けてくれてありがとう」と言わんばかりの笑みを浮かべる。

「…国土の東にある、周りを農園に囲まれた小さな町です。自然と調和した麗らかな景色がすごくいいので、是非とも皆さんに見てもらいたいところです。それに加えて、ご近所さんがみんな——」

そこまでは楽しそうに話を進めていた。だが、突如として話が詰まる。やっってしまった!

私は、咄嗟の判断からスパちゃんに対して善意で地獄への道を舗装してしまったという事実に、ようやく気が付く。しかし、あまりにも気づくのが遅かった。

スパちゃんの表情がどんだん曇っていく。

ひどい悪夢に魘されて、それに屈しないよう必死に堪えている様に、ごくんと、顔の筋肉が力むようにして固唾を飲む。

ごめんなさい、こういうことをするつもりじゃなかったのと、心の中で謝ったところで事態は好転しない。

「スパシテルさん?」

横にいた先生が、スパちゃんの肩に優しく手を乗せる。

「はいっ!」

スパちゃんは声を張り上げる。

軍隊のようにキリつと、八の字にかかたとを揃えて先生の方をマジマジと見つめる。

一瞬だけ、右手が上がりかけたところを私は見逃さなかった。

上がりかけた右手をゆっくりと下すと、遠目から見ても分かるほど力強く手を握る。

ほんの僅かに、小刻みに揺れているところも、私は見逃さなかった。

「では、スパシテルさんはあそこの空席に座ってください」

先生がそう言うのと、スパちゃんは私とほど近い位置の席に座る。

休み時間になると、スパちゃんはより近い席のヒシアマゾンやブライアンに話しかけられ、先ほどの緊張感で張り裂けそうになっていく雰囲気とは打って変わって、年頃の女の子同士特有のほんわかした穏やかな雰囲気でも話を弾ませる。

私も混ざりたかった。

いや、行かなければならない。

スパちゃんにトラウマを掘り起こしてしまつてごめんと謝らなければならないのだ。

しかし、心理的抵抗が今座っている椅子に鉄鎖のように繋がれて、立ち上がることができなかつた。

心臓が罪悪感に突き動かされて、激しく鼓動を繰り返す。

やがて、スパちゃんはヒシアマゾンとブライアンに連れられてどこかへ行つてしまつた。

後悔の念のみが、その場に残留していた。

「うん。美味しいー！」

私が入れたミルクティーを満面の笑みで飲むスパちゃんを見つめつつ、私は今日一日で起きた様々な事を思い出す。

スパちゃんが喜ぶと、私もつられて、その喜びに共感するように微笑ましい気持ちになる。

しかし、すつきりと、素直には喜べなかった。どこか後ろめたい気持ちが引つかかっているのだ。

今こそ、今こそ言わないと……

二人きりの空間で、私は今度こそ覚悟を決める。

今言わないと、これからもずっと引きずってしまふのだから！

「いやー、あのときは助け舟を出してくれてありがとう」

「へ……？」

話そうとした瞬間、スパちゃんはこういうわけか、私に対して感謝の意を表す。

なぜ？という単語で頭の中が一杯になる。

どこがありがとうなのか、そのとき見当がつかなかった。

「あのとき……？」

純粹に疑問に思ったことを口にする。

すると、スパちゃんもまた、純粹に私の問いに答える。

「ほら、私がヒシアマゾンに質問されてたとき、言葉が詰まっちゃったでしょ。あのときローレルちゃんも助けてくれなかったら、入学デビューに失敗してたかもしれないから……だから、ありがとうって、言いたかったの」

これから謝らなくちゃならないという考えと、感謝されて嬉しいという二つの相反する気持ちがごちゃ混ぜになって、一瞬思考が停止する。

本当はもつといい言葉があるはずなのに、「うん…」としか言えなくなってしまふ。

また、あの時のような迷いに陥ってしまった。

——相手が感謝してるんだから、別に謝らなくてもいいんじゃないの?——
心の中の悪魔が、動揺する私に対して囁いてくる。

——いいや、今度はこそはと誓ったじゃない!——

今度は、心の中の天使が糾弾する。

「スパちゃん」

声が出る。

「なあに?」

それにスパちゃんは反応する。

もう後戻りはできない。

私はそう悟った。

そして、私は決意する。

「…………ごめんなさい」

「えっ？」

スパちゃんは驚く。

驚いた表情を見るのは初めてだ。

「私、スパちゃんに故郷はどんな感じなんですかって質問をしたけども、そのときスパちゃん、言葉が詰まったじゃない。…………もしかしたら、スパちゃんのトラウマを掘り起こしちゃったのかなって…………」

「トラウマ…?!」

「うん…:スパちゃんの祖国って、今内戦してるよね。もしかしたら、私の質問が原因で、戦争中の辛い経験を思い出させちゃったんじゃないのかなって、ずっと心残りだったの…………」

「…………」

スパちゃんも私も、あと一步で坂を登り終えるというところで言葉が詰まる。

スーッと、息を吸って固唾を飲んでコンディションを整えた私は、最後の力を振り切る。

「だから…………:スパちゃんに辛い思いをさせちゃって、ごめんなさい」

私は言い切った。

その瞬間、なんとも言えない脱力感で胸がいつぱいになる。罪悪感か、それとも達成感からか、眉間と目元が熱くなる。

スパちゃんはどんな表情をしてるんだろう。

スパちゃんの表情を確認するまで、泣いても笑ってもだめだと戒める。

そして、私はスパちゃんの方を向いた。

「大丈夫、安心して。私はへっちゃらだよ」

全てを包み込むよう寛大さを表すように、スパちゃんは微笑んでいた。

そして、スパちゃんの言葉を聞いた時、肩の荷が下る。

真にやり遂げたような気がした。

「確かに、私は戦争のせいで辛い経験をしたよ……もう、あのころの日常は戻ってこないと思うと、確かに辛い……けどね、新しい、平和な日常と友達を手に入れたから、私は耐えれてる」

そこまで話を進めると、スパちゃんはニカツと笑う。

「ローレル……私の心を気にしてくれてありがとう。ローレルは人を思いやる心があつて、優しくして、本当に……いい人だよ。ローレルが友達で、私幸せでたまらないよ！」

心の中に残っていた暗いモノをすべて吐き出して、引つかかるモノがない今、スパ

ちゃんの温かい励ましのエールが、私の心を優しく包み込む。

嬉しかった。

「そうだ、このままギクシヤクしたらあれだからさ……ハグでもして全部洗い流そうよ！
ほら、友情の誓いつて感じだね」

と言うと、スパちゃんは両手を広げ、いつでもきていいよと言わんばかりに微笑む。

そして、スパちゃん豊かな胸元に、私もまた両手を広げて飛び込む。

二人の体温が入り混じり、鼓動がドクドクと服越しに聞こえてくる。

「温かいね」

「ローレルも」

簡素なやり取りを経て、暫くはお互いを抱きしめ合う。

やがて、どちらからともなく離れ、目と目が合う。

「こうやってさ、お互いの想いを伝え合える仲って素敵だと思わない？」

スパちゃんにはにかみながら言う。

「そうだね。うふふ」

と、私は自然とこぼれる笑みと共に答える。

黒髪のボブ。

どこか世界の理を見通すような冷めた顔つきに、蒼い眼。
アスリート特有の、スラツとしたスリムな躰。

一見すると、スパちゃんはストイックでクールな人だ。

でも、話しかけると活発で、いろいろな表情を見せてくれる。

それに、親身になって話してくれる、温かい人だ。

そんな、優しき心を内に秘めた人と、私は友達になった。

これからもずっと、友好関係が続く……

そう、思っていたのに……

兵士を乗せた2両のT-34戦車は、エンジンの唸猛な唸りを周囲に響かせながら、
廃墟と化した村の街道を突っ切っていた。

「誰もいねえ。人っ子一人、動物すら……」

「ああ、セルビア人もクロアチア人もボスニア人も、みんな……ね」

難民と化したか、はたまた虐殺されて存在を消されたか——この村の住民が誰もいなくなつた理由を知っている者は、少なくとも彼女らの中にはいなかった。

しかしながら、事の真実はどうであれ、ろくでもない理由であることは確かだろうと、誰もが目星を付けていた。

この程度の事に、わざわざ理由を見出すことは無駄な行為である——という考えをするものが、兵士の中に少なからずいた。

なんせ、今まで何回、何十回も似たような景色を見てきたのだから、今更いちいち理由を見出すのは疲れるから、と……。そのような憂鬱な慣れに屈服する彼女らは、周辺に充滿するガソリンの臭いと微かな死臭の香りを嗅ぎながら、戦車に揺られていた。

彼女らの表情は、虚無そのものだった。

キヤタキヤタキヤタキヤタ……

履帯が軋む音は鳴りやまない。

虫や動物、風や植物が奏でる自然のオーケストラはとつくのとうに解散し、今やエンジン、炎、銃声、悲鳴といった現代科学の産物が、戦場という名の劇場を音響方面で彩る。

用水路に嵌まって燃え盛るジープの横を通過したその時、パチパチと焼ける音とヒリ

ヒリとした熱風を間近で浴びたことで、ベリヤーヴァは本能的に嫌悪感を示して耳を畳む。

「……はあー。嫌な光景だ……」

ベリヤーヴァは炎上するジープを流し見しつつ、戦前にほんの一瞬だけしか味わえなかった学園生活の記憶を、頭の中に浮かべて懐かしんでいた。

しかし、それは早々に打ち切られることになる。

中から尋常じゃないほどの量の蚊と、動悸を誘発させる強烈な悪臭が漏れ出す、セルビア語の侮辱的な落書きで穢された小さなモスクを横切った瞬間、強制的に目が覚めたのだ。

結局、ここにいる限り妄想の世界に入り浸ることすらできない。

とつくのとうに諦めたはずなのだが、それでもベリヤーヴァは、一途の希望に託して何度も何度も挑戦していた。

だが、そのたびに、戦場の要素に邪魔されて現実を引き戻されていた。

「またか」と憤る。

だが、もう疲れて、あるいは慣れて怒りは沸かなかった。

「P o j e d n a l j u b a v , j u t r o , u t u i n i , d u š u n
a m u v i j a , s v e t e š n j e , b e s k r a j n i m m i r o m p

l a v i h m o r a , i z k o j i h c r v e n e z r n a k o r a l a ,
k a o , i z z a v i a j a —」

かつて友人と共に謳った詩を口ずさむ。

この詩のように、今頃友人は平和な景色を堪能しているのだろうか、と、ベリヤーヴァは物思いに耽っていた。

彼女らの戦いは終わらない。

この世に不条理が存在し続ける限り。

第4話 模擬レース

ここにきて二日目、俺は順調に授業をこなしていた。

が、やはり昨日のことで目立ちすぎたためか、心なしか視線が熱い気がする。

あー、腹減ったな。

と、間抜けな事を思いつつ、先生の授業そっちのけで外をぼんやりと見る。

ああ、あの雲の形はお魚さんだな、そうだ、お昼になったら今日はお魚を食べよう。

自分が戦っていた所は、セルビアとほど近い内陸部であったため、魚を食べる機会には恵まれていなかった（もつとも、食料自体恵まれていなかった）。

ここでは、まともな食べ物をたっくさん食べれるのだ。

だからこそ、戦友も連れてきたかった……

いや、これ以上考えるのはやめよう、涙が出る。

……さて、授業に集中しないとあと、奇跡的に与えられたこの機会を最大限に活用しようという気合を入れた瞬間、不意に腹から音がなる。

グウウウ

なんてことだ！もう助からないぞ！！

昼飯の事を考えすぎて、ついうっかり腹を鳴らしてしまった。

また、雷鳴のごとくあまりにも音が大きかったからか、クラスの中が騒然としてしま
う。

俺はスペちゃんでなければオグリんでもないのに、腹の音を大胆に響かしてしまっ
たのだ。

ぐあー、はずかしい……、これにはさすがに赤面してしまう。

しかも追い討ちをかけるように、その後も何回か俺の腹の中でダイナマイトが起爆し
てしまう。

しゃ、しゃあない！水を飲んで我慢だ我慢！

授業終わり、早速準備に取りかかろうとすると、ヒシアマゾンが俺を呼び止める。

「スパ、あんた朝御飯はちゃんと食べたのかい？」

「いや……というか、むしろ食べていいの？」

なんでそれに気付けた?!

と言うか、食べていいものなの？

話を聞いたヒシアマゾンは、苦笑しながらワケを説明する。

「えっ、あはは……けっこう朝早くから食堂に居ただけど、スパを見なかったからもし
かしたらってね」

ははあ、なるほど。

確かに、よく考えてみれば、ここは平和なのだから朝食を取る機会があるし、何よりそれだけの備蓄と兵站が整っている……

というか、ナチュラルにそう解釈してた自分に驚愕する。

戦場なんてない普通の生活を送っているのならば、常識的に考えて朝食は食べるはずだ。

にもかかわらず、その“常識”が出てこなかったということはつまり、完全に戦場で生活に染まっていたからに他ならない。

昨日の夜ローレルと仲を深めてたりして平和を謳歌して、この生活に慣れたつもりでいた。

だが実際は違った。

この些細な勘違いに、俺は自分自身が怖くなる。

まだ終わっていないのだ、と……

いや、気にするからズルズルと引きずってしまうんだ！

いったん辛い過去は忘れて、今日の前にいる幸せと共存することに注力しよう。

そうすれば、元通りになるはずだ。

「はっはっふ…はっはっふ…」

放課後、昼飯を食べて完璧な状態になった俺は今、これから行われる選抜レースというものに備えて自主トレーニングをしていた。

選抜レースとは、いわばPRの場とでも言えよう。

トレーナーと未契約のウマ娘のほほすべてがこのレースに出て、己の実力を誇示することでトレーナーの目に留まり、契約を結んだりチームに入ったりするのだ。

俺はもちろんの事、記憶に正しければアマゾンやブライアン、ローレルもまだ未契約なので、みんな何回かに分けて行われる選抜レースのいずれかに出るはずだ。

選抜レースで好成绩を収められるよう、あまり時間はないがやらないよりはマシという事で、単純な内容ながらトレーニングをすることにした。

学園の近辺でいい感じにジョギングできるところはないかと、その旨をヒシアマゾンに聞いたところが挙げられたので、さっそく現場に赴いてトレーニングをしているというのが、ザッと表した今の状況である。

ちなみに、ヒシアマゾンは寮の仕事だか何だかで俺と並走トレーニングはできず、ブライアンとローレルは気づいたらどこかへ行ってしまったので、そもそも誘えなかつ

た。

なので、泣く泣く俺一人でトレーニングをすることになったのである。

「ふー……つかれたあ……」

ジョギングコースに入っている公園に付いた時、時間がちようどいい感じだったので歩みを止めて、たまたま近くにあったベンチに座る。

耳を澄ませば、カーカーと鳴くカラスの声がどこか遠くから聞こえてくる。

夕焼けが辺り一帯を薄い赤とオレンジが混じった色で照らし、日没の時間が迫っていると一目見てわかる景色になっていた。

久々に、思う存分走れたことに俺は満足する。

平和な街並みに、緑で生き生きとした自然の中を走れたことも良きポイントだ。

しかし、国に残してきた学友たちは、戦場と言う血が付いた鉄籠のなかで窮屈な思いをしている。対して、俺は一足先に、自由にのびのびと翼を広げている。

自分だけこのような幸福を受け入れていいのだろうか、と、心の隅で迷いが生じる。素直に喜ぶことができなかった。

街灯の下で集会をしているカラスを、ベンチにて脱力する俺は黄昏るように眺める。

「あと十分ほどしたら、来た道を戻って学園に帰ろう」

課せられた義務から目を逸らすように、ボーっとそんなことを考える。

……

……

……

「はっはっはっ……」

誰かが息を切らしながら公園の中に入ってくる。

ボーっと周囲の環境音に耳を澄ませていた俺は、不意に現れたその音に気を取られて、思わず振り向く。

そこには、汗びっしよりのナリタブライアンがいた。

ブライアンは顔に張り付いた数本の髪を汗と共に振り払うと、近くにあった水飲み場の水を豪快に頭からかぶり、次に顔を洗い始めた。

びしょ濡れのハンカチで顔を拭ってるブライアンが、不意に手を止めて俺の方を見る。

そして、フツと少しだけ口角を上げると、俺に歩み寄ってきた。

「ひ……」

俺は恐れおののく。

なぜなら、ブライアンが金環日食みたいに真っ暗になったからだ。

でも、狼のような金色の眼だけは違った。

水に冷やされてもなお消えない闘争心を模るが如くキラキラ光っている……ように感じた。

後に授かる”怪物”という異名は伊達じゃないと、ブライアンの強さの片鱗を垣間見て、心の中で唸る。

「よお、隣座るぞ」

極めて簡素に用件を言うと、その言葉通り俺の隣に腰を下ろす。

ブライアンは脚を組み、両腕を広げてベンチの背もたれに両腕を広げて、ビニールプールの空気が抜けるときみたいながい溜息をつく。なかなか疲れているようだ。

それにつられるように、俺も足を組む。

そして、目を閉じて顔を仰向けにするブライアンを俺は見つめる。

「ブライアンは、今日どれぐらい走ったの？」

流れというものは作るもの！

てなわけで、俺が話の起点を形成する。

「日本語がずいぶんと流暢だな……ま、そうだな……気がいくままに走ってたら、気づいたらこんな時間になってた」

ブライアンは片目で俺の方を見ると、再び瞼を閉じる。

「そのジャージに、ここにいてるってことは、オマエさんも私と同じように走ってたんだろ

う。自主トレか？」

「うん」と、俺は返事をする。

すると、ブライアンはすぐには会話を続けず、一呼吸ほど間を開けてから会話を再開する。

「どうだ、ここの走り心地は」

若干、言葉が淀む。

「……すぐいいよ」

けれども、俺はきっぱり”良かった”と言い切る。

だって、実際そうなのだから。

「ここのジョギングコースはさ、空気が澄んでいて、自然の匂いもいっぱいして……なんというか、とてもいいのよ。こんなの久しぶりだよ」

「そうか」と、ブライアンは薄く笑って言う。

「私もここが好きだ」

ブライアンはどこか懐かしむような表情で、公園の様子を見渡す。

「……だが、もっと好きなものがある」

「もつとっ？」

てつきり、様子的にここが一番だとも言いたげだったので、それを上回るなにかが

あることに少し驚く。

とにかく、”それ”が何なのかをしつかり聞きとるために、耳を研ぎ澄ます。

「レースだ」

やっぱり、というのが第一印象だった。

日ごろから闘争心が溢れればかりの印象があるブライアンならびつたりな答えだ。

と、自分の中で勝手に納得する。

「皆が我こそはと、たった一つしかない栄光の玉座を取るために、己が持てる全てを注ぎ込んでレースに挑む。闘争心がむき出しになったあのピリついた雰囲気ときたら……最高だ。そこで、私の足でぶつた切つて一着をかつさらえば、尚良しだ」

ふむふむ、なるほど……と俺は相槌を打ちながら話を聞く。

生き生きと話すブライアンが、正直言つて怖い。

より怪物のように見えてくる。

畏怖に近い感情を持って、俺はブライアンの話に集中する。

「強い相手と戦いたい……私は、常日頃そう思っている。じゃないと、この渴きは満たされない」

そう言うと、ブライアンは自分の心臓あたりを指さし、さらに円を一周描いてその”渴き”というものを強調する。

要は、体は闘争を求める……というわけだ。

「私に、その渴きを潤すことはできるかな…」

会話が途切れる。

俺とブライアンは暫くの間、カラスの鳴き声と遠くを走る車たちのエンジン音、そして二人の息遣いしか聞こえないような静寂に包まれる。

そんな空気の中、ブライアンが目を開け、俺の顔を見つめる。

「やってみなきやわからん」

そう一言残すと、腰を上げてベンチからむくりと立ち上がる。

ブライアンの顔に夕陽が重なり、眩しくて直視することができなくなる。

まだ乾かないで顔に残っていた水滴が、ブライアンの輪郭を滴る。

それが分離して地面に吸い込まれていくとき、夕陽に反射して、まるで小さな宝石のようになる。

美しい。

俺は直感的に見惚れる。

先程までの、渴きを満たそうとする獰猛な怪物は何処へと、自分にふと問いかける。

「ちよつと待ったー!!」

そこへ、幻想的な霧囲気には不釣り合いな大声が割って入ってきた。

声がした方を振り向くと、なんとそこには、茂みの中から体を出すローレルがいた！
「げっ！いつからそこにいたんだ?!」

ブライアンはかなり驚いた様子でローレルに質問する。

そして、ローレルは茂みから出て、ジャージに付いた葉っぱを振り払いつつ俺らの前にまどくる。

「ブライアンちゃんと並走したくて、ずっとあそこで待ってたの」

ローレルはさも当然のことと言わんばかりの真顔で、ブライアンの質問に応える。

その淡々としたやり取りに俺は何とも言えぬ恐怖感に駆り立てられる！

というか、もしかして俺が来るよりも前から待ち伏せしてたのか?!

忍耐力と気配を消す力がヤバすぎでしょ……と、俺は心の中でツツコミを入れる。

「スパちゃんもブライアンちゃんも、選抜レースに出るんだよね。それならさ、お互いにもてる力をぶつけ合って研磨するトレーニングが必要だと思うんだ……だから一緒に、並走!しよう!!」

ローレルは両手でガッツポーズを決めて、自信満々な笑みで俺らに一步近寄る。

「う、うん。そうだね。確かにロレッツちゃんの言う通りではある……」

ローレルの言う事は確かに一理ある。

けども、あの行動と今このタイミングで言うことに只ならぬ狂気と闇を感じてしま

い、果たして素直に受け入れてしまつて良いのか?!という迷いが生じる。

「んんん…」

「ブライアンちゃん!!」

「…まあ…いいだろう」

隙はこじ開けていくものと言わんばかりに、自分の提案をちから技で通していく。

その大胆さは見習うところがありそうだと、こればかりは素直に感心する。

とはいえ、俺もブライアンやローレルと共にトレーニングをしたかつたという本心があるのもまた事実……。

悪くはない……いや、むしろこの機会を無駄なく生かそうではないか!と、考えを改める。

「じゃあ、ここを基準にスタートしよう!」

そう言うと、ローレルはジョギングコースへの入り口のところで仁王立ちして、手を振つて空中にスタートラインを描く。

「そこなくつちやね」

「しょうがないな……いいよ、付き合つてやる」

俺とブライアンは軽く柔軟運動をしながら、ローレルが示したラインの上に立つ。

「ゴールは学校の正門で。準備はいいかな?」

と、ローレルが確認してくるので、俺は「うん」と答える。

そして、ブライアンは獲物を狙うような鋭い目つきで前を見つつ頷く。

極めて簡素なやり取りで済ますということは、相当集中しているであろうことが伺える。

やるときはやるようだ。

「いちについで」

ローレルが自ら掛け声を出す。

二人と一緒に走れるなんて、正直言って転生して以来夢にも思わなかった。

心が弾む高揚感と共に、俺はその”時”に備えていた。

「よお〜い……」

ギユつと、右足に重心を傾ける。

「どん!!」

合図が切られた瞬間、俺ら3人はほぼ同時に前へ飛翔する。

ブワン!という重い風切り音と、ちよつとした衝撃派を出して空気抵抗を打ち破り、ぐんぐんスピードを上げて我先にと前へ躍り出る。

ふと視線を横へ向けると、そこにはローレルがいた。

先頭ブライアン、後方並んで俺とローレルという、トライアングルのような形態で

レースは展開している事を確認した瞬間であった。

無意識のうちに、ローレルの表情に視線が向かう。

まるで磁石で引き寄せられるようかのに。

真剣な眼差しで前方を見据えているが、口元はどこか楽しげに口角が上がっている。

これから起きる未知なる刺激に悦んでいるようでもあり、それでいてブライアンとの

レースが待ちきれない……そんな表情だ。

俺もそれにつられて笑みが浮かぶ。

いつか、ローレルやブライアン、そしてヒシアマゾンらと共に本番のレースで走りた
い……！そう思うと、さらに気分が高揚し、スピードが増していく。

かくして、俺らは学園^{ゴール}に向けて駆ける。

ちなみに、ちゃんと門限には間に合ったということを、念のため述べておく。

その日以降も、俺は自分で、或るいは友と共に鍛錬を積んだ。

アイステイーでも飲みながら図書室で走り方やコースの勉強をしたり、ジム室でなん

か色々やったりして、自分自身で磨くことはもちろん。

友と知識の共有をしてより走りを効率化したり、時には並走などして、大人数だからこそなせるトレーニングをしたりした。

また、ヒシアマゾンの寮の仕事や、ブライアンの生徒会の仕事をローレルらと共に手伝ったりなど、サポートも積極的になしていく。

時には、“過去”が襲い掛かってくることもあった。

だが、俺はそれらをすべて跳ね除けて、“今”を守っている。

そんなこんなで、遂に本番がやってきた。

体操着に着替えた後に更衣室を出て、いざターフまで駆ける！

ちなみに、俺に支給された体操服の種類はなぜかブルマだ。

これが恥ずかしくて、実は今まで一度も穿かなかった。

が、今回のようなガチのレースでそんな我儘は言つてられないと、羞恥心を押し殺して穿かざるを得なかったのである。

なんというか、露出面積が多くて恥ずかしいものの、ヒシアマゾンとおそろいだと思えば……わたしは一向にかまわんツツ

観客席に沢山の観衆がいることが意外だなと少々驚く。

観客の内役としては、既に契約を済ませている先輩方だ。

金の卵を我が先に見つけるのだと、俺らに期待していると好意的に解釈する。それはともかく、選抜レースの概要を聞く。

800m右回り。あとは、念のためレースのルールだとか諸々が説明される。まあ、至つて普通だ。

そして、説明の終わりにゼツケンを渡されたので、早速それを装着する。

出走人数は八人で、俺が受け取ったゼツケン番号は四番、まあまあのポジションである。

周りはレースが始まるまで個人で準備体操に取り掛かる中、俺はこの日のために鍛えに鍛えまくったトモを触つてなんらかの不調がないか手探りで確認する。

端から見ると気持ち悪いが、ご自慢のトモと太ももを撫で回す。

「今日もよろしくな、相棒」と念を込めて、地雷原から瓦礫の山まで、ありとあらゆる戦場を共に戦った足をポンポンと軽く叩いて己を鼓舞する。

『ただ今より、選抜レースを開始します。第一出走者の方々は、ゼツケン番号に従つて、ゲートの中に入ってください』

放送委員会が開戦の合図を伝えるので、走つてる時に腹チラをしないようシャツをブルマに突っ込みつつ、足早にゲートに向かう。

さて、いよいよ勝負の時間である。

一息ついて覚悟を決め、ゲートの中へ前進する。

ふと、周りの人はどんな気持ちでこの戦に挑んでいるのかが気になった。

左右をキョロキョロと見渡すと、闘争心と共に声が溢れている者がちらほらいることが分かる。

「勝つていいチームに行くんだから……!」

「絶対に負けない……!」

「あたしはダービーを勝つんだ……!」

という風な具合で、皆声に漏れるほど闘志がむき出した。

一触即発……という表現でさえも生温いほど、雰囲気はピリついているのである。

ふと、ブライアンの言葉が頭の中を過る。

なるほど、この雰囲気は臨場感……これから始まる激戦が容易に想像できて、闘争心が滾る。

ギャンブルで一進一退の展開に自らが挑んでいる時みたいなの、それでしか味わえない独特なハラハラ感がここには存在するのだ。

だからブライアンが好きになるんだらうなと、自分の中で勝手に解釈する。

選抜レースでこれなら、重賞はどれぐらいハラハラするのだらうかと、今後の未来に胸を弾ませる。

さて、もうそろそろでゲートが開く頃合いだ。

スタートの姿勢になって、目の前の鉄の扉に対して持てる全ての集中心を注ぐ。

そして、スーッと息を肺に溜め込んで、開く瞬間を待つ。

短い間だったけどもローレルたちと一緒に、この瞬間をイメージして何度も練習してきた。

大丈夫だ、行けるはずだ！と、自分を鼓舞する。

ガシャン

という音が鳴って、遂にレースが始まる。

『スタートしました。2番やや出遅れ気味ながらも順調にレースは展開しております』

練習が功を成して、俺は順調なスタートダッシュを決める。

しかし、そこからが問題だった。

俺はバ群に揉まれてしまい、気づけば内ラチ近くまで流されてしまう。

しかも、出遅れた人がちようどいい具合に後ろの蓋をしまっており、前と横を行く者は俺の事をガツリマークしているためか、ビクともしなくて抜け出せない。

大ピンチ！

俺は今、包围されている！

『先頭一番、後ろピツタリついて八番その斜め後ろ三番、一馬身ほど離れてラチ沿いに五

番、後ろに四番と横に六番と七番、最後方に二番。第三コーナー通過して第四コーナー。そろそろ団塊が動く頃合いか!？」

確かに不味い状況ではあるが、ここで取り乱さないのでがスパシテルクオリティだ。

絶望的な状況ではあるが、ここで炸裂するのが俺の加速力よ。

ストライド走法から生み出されるそれが、ぐいぐい重力を引っ張るかのような加速を生み出すって事を、俺は既に把握している。

今はガツチリ固められているが、必ず隙は生まれるはずだと俺は目星をつけている。

『先頭が最後の直線に入りました』

放送委員会の淡々とした実況とほぼ同時に、先頭が遂に最後の直線に入ったことを視認する。

来るぞ!と心の準備を即座に決める。

俺がコーナーを終えて直線に入ったその瞬間、今まさに目の前で隙が生まれる。

俺の横を走っていた選手が、コーナーから直線に入る際に生じた遠心力に引っ張られて、僅かな隙間が生まれたのである。

ニヤリと俺は微笑する。

このタイミングを、俺は待ちくたびれていたのだ。

靴底が芝を蹴り飛ばそうとしたその瞬間、俺はグツと力を込め、空間を滑空するかの

ように加速する。

『バ群が崩れた！スパシテル抜け出す！そして、大外から一気に上がってきたぞ！びつくりごぼう抜きだあ！』

最高の加速感が、活発化した筋肉によって極限まで張った躰を包み込む。

唯一抜きんでて並ぶものなしと化したその時、俺は勝利を確信した。

『四番スパシテル、三バ身差でゴールしました』

やっと報われた。

今日まで生き残れて本当に良かった…！

と、心の中で喜ぶ。

過去の黒い影が忍び寄っているという事に気づかぬまま、俺は一時の優越感に浸るの
であつた……

第4. 5話 嘗ての英雄に告ぐ

あの頃の私は、はつきり言っただけだった。

しかしそれは、あの娘に出会うまでは……の話である。

新人トレーナーとして中央トレセン学園に配属された私は、なかなか担当を得られない日々が続いていた。

成果至上主義の職業であるトレーナーたるもの、担当無くして仕事はできない。

故に、長い間担当を作れなかった場合は辞めていく事が多い。

仮に、担当を得られたからと言って将来安泰とは言えない。

活躍ウマ娘を出さなければ、指導能力の信用が無いと見做されて、スカウトを断られてしまうことがある。

そうなれば、退職一本道だ。

それを避ける為の関門は、猫の眉間並に狭い。

オープン戦等も視野に入れば幅は広がるが、一年間でG3以上の重賞を勝てるウマ娘は、僅か2〜30人程しかないと言われている。

仮に将来勝てる逸材のスカウトをしたとしても、まだ安泰とは言えない。

どれだけ素質があろうとも、こちらの指示が良くなければ持てる限り最大級のパフォーマンスを発揮しきれないのだ。

また、ウマ娘に”故障”のリスクも付き物だ。

例えば、トレーニング中に骨折が発覚したトウカイテイオー等がそれに当たる。

そういう危険も未然に防がねばならないという、担当の健康を維持する責任も生じるのだ。

トレセン学園に入るウマ娘達にとって、走るこそ青春だ。

そして、その青春を奪う故障を防ぎきれなければ、青春を奪ってしまうとも言える。

なので、今後の人生や名声をも左右する、恐ろしく重い責務を背負わなければならぬのが、トレーナーという職業である。

私は、ひとまず一步を踏み出さなければならない……とは思っていた。

が、そういう重大な責任を背負う事を心のどこかで恐れて、なかなかスカウトに踏み切れない惨めな新人生活を送っていた。

「仮にスカウトしても、どうせダメなのだ。断られるだろう」と自分に言い聞かせて、怠惰を誤魔化していた。

今ではそれがたまらなく恥ずかしい。

なぜそこで一步を踏み出せなかったのかと、今からでも過去へ飛んで叱咤激励したい

と後悔することがたまにある。

そんな、のらりくらりとした日々を送っていた時だった。

あの日、私は選抜レースを見に行った。

理由は言うまでもなく、スカウトの為でもある。

観客席に腰かけて、メモ帳にペン、そして出走者名簿を手にゲートを眺めていた。

ガシャン！

そして始まるレース。

『スタートしました。2番やや出遅れ気味ながらも順調にレースは展開しております』

つと、ここで出遅れるウマ娘が一人……私は暢気に候補から外す。

食わず嫌いしている暇などないのに。

これからの様にレースが展開していくのか、私はそれに注視しつつ固唾を飲んで

レースを見守る。

そして、遂に最後の直線へ差し掛かった。

バ群がぐにやりと変形する。

その時だった。

「なんだありや！すごい！」

と、はつきりと声が聞こえてきた。

私は、その声の主が誰なのか目星をつける事よりも、”今日の前で起きているとある選手の快進撃”に注目が行く。

それは、この場に集まる皆も同じようだった。

私は唾然とする。

その驚異的な末脚に。

荒削りの原石が集う選抜レースに、まるでG1級の極限まで磨かれた高級な宝石が一つだけ、そこに存在しているような異彩を解き放つ。或いは場違いとも言う。

これには、思わず唸りを上げざるを得ない。

あれは、四番――

ぐんぐん前へ登ってくる選手がどの番号なのかを私は把握する。

まだデビュー前であることを考慮すると、一足先に無駄を削ぎ落としたようなフォームであり、同世代と抜きんでる印象だった。

頭を異様に低くした大きなストライド走法もまた特徴的である。

彼女の走りは、明らかに素人のそれではない。

とつくのとうに一皮向けている――そんな印象を受けた。

『四番スパシテル、三バ身差でゴールしました』

あつという間に、彼女は見事に勝利する。

圧倒的だ……と、私は少しの間、開いた口が閉まらなかった。
パチパチパチパチ

その驚異的な勝利劇に、思わず皆は拍手をして敬意の念を示す。

こんなにもすごい逸材なのだから、スカウトする他あるまいと言わんばかりに、ト
レーナー群は早速我先にと走者を取り囲む。

が、そこで私は妙な違和感を感じ取った。

心なしか、明るく誘う言葉の中に、暗い言葉が入っている気がしたのだ。

間もなくして、それは確証へ変わる。

「噂によるとさ、夜な夜な発狂してるらしいぜ？」

「なんかヤバいって噂は俺も確かに聞いている」

「さすがに重度のやつれの面倒を見るのは厳しいな。わざわざ問題に首を突っ込むってのは、ちよつと……」

スカウトしようか悩む声は聞こえるが、誰も行動にでない。

心なしか、一着よりも二着や三着といった者にスカウトが集中しているように感じる。

なかなか異様な雰囲気だった。

と、ここで私はあることを思い出した。

内戦中の国からきた留学生がいるというのと、その留学生が今日の選抜レースに出ることを。

そうこうしているうちに、彼女の周りからはトレーナーがいなくなる。

すると、寂しそうな表情をしてそっぽ向き、とぼとぼどこかへ向かって歩いていってしまう。

その間にも、他の者がスカウトを受けている。奇妙だ。

一着の者がまったくスカウトを受けてない光景は、これが最初にして最後の光景なので、鮮明に覚えている。

今の状況を簡潔に表すとすれば、”スーパーハイリスクハイリターン”

これが、彼女のスカウトを拒む要因となっているのだろう。

今の私であればハイリスクを取らず、おとなしく安全な候補を探していたであろう。

だが、あの頃は若々しくてまだまだパワーがあつた頃であり、「私にならできる!」と言う、若気の至りの過信に陥っていた。

今まで自分を縛っていたそれがむしろ、この場においては利点になるとは……人生、ちよつとした事がとんでもない方向に作用するのだなど、後から気づかされた瞬間でもあつた。

「おいおいおい、死んだわあいつ」

「やめとけやめとけ……」

そう言われつつも、人混みを突っ切って彼女の元へ行く。

人混みを抜けると、不自然に開けた空間に出た。

不意に空間を邪魔されたのが目障りだったからか、はたまた孤独で寂しかったからかのように、唐突に外から入ってきた私に、彼女は目を丸くして見てくる。

一瞬だけ、心の隅で本当にスカウトしてしまつて良いか迷いが生じる。

しかし、私は既に決心していた。

「私の名前は榎本理子と云います。単刀直入に申し上げますと、私はスパシテルさんの走りに大いなる可能性を見出しました：是非、私とともに、栄光を掴みませんか……？」

すると彼女は、キョトンとした表情をする。

「またダメか」そう思った。

断る言葉が次に入ると思った。

だが違った。

彼女は頬を赤くして、瞳に涙を浮かべたのである。

何かまずい事をしてしまったのではないか、と焦った。

そして、彼女は一步二歩とこちらに近づき、私の後ろ手を二人の間に持つてきて、「ありがとうございます」と擦り切れるような声ですすり泣き始める。

ぼろぼろと零れる彼女の涙が、繋がれた手に落ちる。

予想だにしない反応にどうしたらいいのか分からず、私は反射的に「大丈夫だよ」と繰り返す言う。

そして、泣いて落ち着いて顔を上げた彼女はこう言う。

「スカウト……ありがとうございます。あと、脅かしてすみません……。昔の光景を思い出して怖くなったんです……」

「昔の光景？」

私は、疑問に思ったことを純粹に口にした。

すると、彼女は一瞬だけドキリと体が震える。

なにか後ろめたいことがあったかのように顔を下に向けると、そのまま息を荒げつつ、彼女は悲壮感溢れる語り部となる。

「走り終わった後、たくさんのトレーナーさん達が私の元にやってきました。みんな威勢の良いことを言つて、私をスカウトしにきたのです。でも、その姿がだんだん……」

彼女は涙ぐんで言葉が詰つてしまう。

「辛いことを無理して思い出さなくてもいいんだよ。大丈夫、大丈夫」と、どうにか彼女の心を癒すことができないだろうかと、その一心で私は声を掛ける。

すると、彼女は決心したように顔を上げる。

彼女は涙を堪えていた。

「……「なんで俺たちをキャンプに入れてくれないんだ!」「まだ生まれて3か月の赤ちゃんがいるのよ!」「もう何日間もまともな食料を食べてないんだ!少し位分けてくれよ頼むから!」と、そう殺気迫る難民の光景が、私に迫るトレーナーさん達と重なって……恐ろしくなつたんです」

冷静に、なぜそうなつたのか、理由を説明し終える。

泣き崩れても可笑しくない状況だというのに、彼女は涙を堪えるどころか、むしろ平静を装ってさえいる。

なんて精神的に強い娘なのだろうと、しみじみと感心する。

「私は彼らを助けた筈なんです!携帯食を……一つぐらい……!分けたのに、そうしなかった……」

先程の凜とした様子と打って変わって、突然目をカツと見開いて、迫真の形相で叫ぶ。その気迫に押されて、私は思わず一步後退りしかける。

だが、ぐつと堪える。

ここで退いてしまうということはつまり、彼女に対する責任を放棄するのと同じなのだから……

故に私は、むしろ前へ進み、より彼女の近くへと歩み寄る。

そして、そつと彼女を抱きしめた。

「見捨てた……たくさん……うううッ！」

すると彼女の肩は、ひどく震えだす。

我慢していたものが崩壊したように、唸りながら大粒の涙を流し始める。

お高いスーツが涙に濡れておしやかにになってしまっても構わない。

そう心得て、彼女の背中を撫でる。

「あなたはできる限りの事をしようとした。その優しい心さえあれば、いつか必ず報われるはずですよ」

「大丈夫、大丈夫。もうあなたは十分頑張った」と、私は言葉を繰り返し繰り返し、優しく彼女に囁く。

泣き止むまでずつとそうしていた。

どれくらいそうしていたのだろう……数分か？数十分か？……体感としては凄く長く感じた。

そして、彼女は嗚咽が漏れる中、かすれる様な声で言う。

「ありがとうございます……！」

彼女はそう言うのと、涙でくしゃくしゃになった顔を上げる。

「これから、よろしくお願いします……！榎本トレーナーさん……！」

先程よりも声の調子を落ち着かせて、お辞儀をする。

「ええ、こちらこそ。よろしくお願ひしますよ、スパシテルさん」

そう言つて、私は片方の手を差し伸べる。

すると彼女は、涙ぐんで薄く頬が赤い、未だに曇り模様なその表情に、太陽のような二カツとした笑みを浮かべる。

そして、固い握手を交わす。

これが、私とスパシテルの出会いであつた。

第5話 理解と、その果てにあるもの

「むにやむにや……んんん？ここは？」

目覚めると、俺は砲弾クレーターの中で横になっていた。顔を空に向ける。

まるで明け方のような中途半端な暗さの星のない空には、白くて丸い月がポツリと浮かんでいた。

その強い月明かりのおかげで、辛うじて周りの状況を確認することができなくもなかった。

ふと、臭いを嗅ぐ。

だが、何も感じない。

タタタタン——……

妙だなと訝しんでいると、遠くの方から銃声が聞こえてくる。

見つかったら撃たれるかもしれない！

俺は慌てて、猫が丸くなるように身を縮める。

雨が降ったからなのか地面はドロドロしており、うずめると顔や戦闘服に泥がこびり

つく。

せつかくの美少女フェイスが台無しだぜ！と心の中でツツコミを入れる。だが、当然のことではあるがそれに対するボケは無い。

一人漫才が虚しい気持ちを加速させる。

周りはどうなっているのだろうか？

そう思つて耳を立てる。

だが、何も無い。

まるで、自分しかいない空間に放り出されたみたいで不気味だ。

そもそも、なんで俺はここにいるんだ？

当然の疑問が、今更ながら湧いてくる。

周りの光景を見れば、何かわかるかもしれない。

そのような考えに至った俺は、息を殺して砲弾クレーターから顔を出そうとする。

その時だった。

ガシッ

という音と共に、俺の足が掴まれる。

驚きのあまり心臓が飛び出る様な想いで、咄嗟に振り向いた。

なんと、クレーターの底部から青白い手が生えており、その手が俺の軍靴をとてつも

ない力で掴んでいたのだ。

どつからどう見てもまずい事には違いない！

瞬間的にウマ娘が持ちうる最大限の力を発揮するような勢いで足を振り上げる。

だが、ビンっ！と糸を限界まで引っ張ったときみたいな感覚を感じたのみで、まったくビクともしない。

この非科学的現象に動揺した俺は、敵に見つかってハチの巣にされるなんてお構いなしに立ち上がって、どうにかしてこの束縛から逃れようとする。

立ち上がった瞬間、クレーターのありとあらゆるところからポツポツボ！つと土を突き破って、異様に青白くてぐにやぐにやと長い無数の手が現れる。

そして、瞬く間に俺を覆いつくす。

「がっ！はあっ！やめっ!!」

戦場で身に着けた体術で振り払おうとするが、さすがに何十何百とある青白い手には敵わない。

脚、顔、腰、ありとあらゆるところを切断するような力強さで絞めつけてくる。

殺される！と、俺は悟った。

だが、抗えない！

「た、すけ……て……」

そして、その手たちによつて俺は、流砂のように地面に吸い込まれてしまうのであった。

「ぎゃあああ!!」

俺は悲鳴と共に飛び起きる!

「????」

今いる空間が夢の中なのか現実なのか、中途半端な寝起き故に脳の処理が追い付かず、境界線が曖昧になる。

目を真ん丸にして（あるいはガンギマリとも言おう）、酷い錯乱状態に陥ってしまう。それから間もなくして、徐々に思考が纏まってくる。

母語と日本語が混在していた脳内の回線はちゃんと日本語に統一され、脳の指令がしっかりと体全体に行き渡るようになったのだ。

そのため、冷静に判断し、それを元に行動を起こせるようになった。

まず、枕やベッドのシーツを撫でるように触る。

ちやんと毛を触っている感覚を感じられたため、異常はないようだ。

そのようにして、音、視界など、夢と現実を分ける要素を確認していく。

結論！俺は今現実において、しかも起きるにはちょうど良い時間であるという事が判明する。

しゃあ！丁度いい時間に起きたぜラッキー！このまま学校に行く準備をしよう！

いつものハイテンション美少女な俺だったらそう考えていただろう。

だが、今回はそうはならない。

なんせ、とんでもない悪夢を見させられて、吐き気、頭痛、めまい、震えという悪夢が残した後土産に、今俺は苦しめられているのだ。

そのような状態で、暢気になれるはずがない。

「う。ぷっ……はーっ……はあ……はあ……うっ！」

今にも飛び出しそうな吐き気を口と腹に手を当てて必死に堪え、言葉にならない、細かい唸りを上げながら悶絶する。

「はーっ……ふーう……！」

なんでこんな辛い思いをしなくちやならないんだ！と、吐き口の無い怒りを心の中で爆発させると、自然と涙がポロポロと零れてくる。

声押し殺しながら、俺は泣く。

零れた涙が口を抑える手の表面を伝い、冷や汗で湿っているベッドの上に落ちてさらに染みを濃くする。

数分ほど耐えていると、やや吐き気が収まっていく。

現実の時間で言えばそれほど長い時間という訳ではない。

しかし、よくありがちな話ではあるが、体感ではそれが物凄く長く感じて本当にきつかった。

「…早くいかなきゃ」

くらくらする頭を手で押さえながら、俺はベッドの上から立ち上がる。

そして、朦朧とした足取りでクローゼットへ向かい、制服を取り出すためにハンガーに手を掛ける。

世間一般的には、「休め」と言われても可笑しくない状態だろう。

しかし、俺は休むことができない。

なぜなら、国に帰される可能性があるのだ。

国は、戦線からわざわざ貴重な戦力を引き抜いて、俺を留学させた。

これはつまり、戦場で戦う以上に留学させた方が価値があると国が判断したからに他ならない。

故に、国の期待に応えられなかったらどうなるか？

その末路は、日の目を見るよりも明らかだ。

あの地に戻れば、今度こそ砲弾やら銃弾やらの肉ミンチになりかねない。

そんなの嫌だ！生きたい！

だから、生きるためには優秀な学業成績とレース戦績を勝ち取って、留学させる価値に値する人物であり続けなければならないのだ。

かつて、ユーゴスラビアにはとある街があった。

その街には、様々な人種が何の隔たりもなく、ごく普通に協調し合って暮らしていた。クロアチア人は日曜日になるとミサに出かけて、セルビア人の神父は豪華な聖堂の中で聖書を読み上げ、ムスリム人は毎日決まった時間に礼拝をする。

そんな、”ユーゴスラビアだった時代”にありふれていた光景と人らの営みが、その街にはあったのだろう。

地図で見ると鉄道線が何本もその町を起点に伸びていて、周辺には小さな田舎町や村

が点在している。

いわば、交通の要衝という訳だ。

国がバラバラになった時、その街をセルビア軍が占領した。

なぜなら、その街の鉄道網を使うことで補給が安定するからだ。

敵軍の重要な補給地点を奪取するというのは、ちゃんと道理の通った判断だろう。

戦争が始まってから間もなくして、クロアチア軍とセルビア軍は、その街を巡って何度も激戦を繰り広げることとなる。

その戦いに、俺は参加していた。

上官の突撃命令と共に塹壕を飛び出し、味方の援護射撃と共に少しづつ前進する。

銃撃音、走る、止む、伏せる。

この四つの繰り返しで、徐々に敵の陣へと迫る。

その時、腹の底から唸るような衝撃を受ける。

間もなくして、凄まじい破裂音と土が宙を舞う。

敵軍の迫撃砲による反撃が始まった際、砲弾の破片から身を守るべく、咄嗟に近くに
あつた砲弾クレーターの中に飛び込んだ。

飛び込んだ際に、何か細長い筒状の物体に当たったような違和感を覚える。

まさか、不発弾か?!

最悪のパターンが頭の中で連想された俺は、大慌ててクレーターの中を確認する。その違和感の理由に、思わず吐き気を催した。

なんと、クレーターの底部に、文字通り人の手が落ちていたのである。きつと、俺らが来るよりも前に戦って、ここに散った者なのだろう。

この手の死にざまがなんとなく視えた瞬間、どうしようもない絶望感に襲われる。俺もいつか、この勇敢にして哀れな手のようになってしまっているのではないか？

そう思うと、いつ訪れるか分からない死が恐ろしくて仕方ない。上、下、左、右へ指を瞬時に動かし、十字を切る。

「あなたはもう十分戦った。天国で、安らかに眠ってください」そう心の中で祈り、軽く土を被せてせめてもの弔いをする。

……でも、結局どれほど神に祈ったところで願いが叶うわけないだろうなあ。

と、信じてでも救われなかった目の前にある現実が、それでも上位の存在に窮愛されたという希望、欲望を粉々に打ち破る。

どれだけ祈っても弾は飛んでくるし、それに当たるかどうかは最早信仰関係なく、運の領域なのだと悟る。

何を信じて戦えばいいのか、何のために戦っているのか。

自信を持つてはつきりと答えることができない。

今振り返ると、あの経験は、命の重さが揺らぎ始めた兆候のうち一つだったと思う。

「——今から小テストの返還をするから、色ペン以外の物全部机の中にしまっておくよ
うに」

授業が始まるや否や、先生はこの前に行った簡単な漢字テストの返還を行うと宣告する。

先生の呼びかけに応じて、クラスみんなは「やば、あんま埋められなかったから赤点かも（笑）」や、「いやー、一個だけ確定で間違ってる問題あるのがマジ悔しいわ」などと、雑音に紛れるように近くの友と駄弁りつつ、返還に備える。

出席番号順にテストは返還されていく。

ブライアンは、「私は数字なんか気にしないぞ」とでも言わんばかりにテストを気にするそぶりを一切見せずに席へ戻る。

ローレルはちよつとにやついていた。

きつと良い点を取ったのだろう。

前述した二人と比べると、ヒシアマゾンは特に、感情が行動に現れていた。

彼女はテストを見るや否や、はあーと大きなため息を吐き、無念そうな表情を浮かべながら席に戻っていった。

最近このクラスにやってきた俺は、一番最後にテストを受け取った。

結果は、満点であった。

「日本語が上達しててすごいよ」

と先生に言われたときは、ちよっぴり嬉しかった。

「点の付け間違えがあったら持つてきてね〜」

少しでも点が上がらないかと粗さがしに躍起になる者、もう無理だと諦める者、高みの見物をする者など様々な人種がこの空間で形成される。

俺の場合は満点だったから、適当に教科書でも見ながら時間を潰していた。

「よし、行くか」

というブライアンの言葉が、後ろから聞こえてくる。

どうやら、先生の点の付け間違えがあったようだ。

ブライアンにとっては幸運だっただろう。

ブライアンが教卓の前に立ち、先生が赤鉛筆を筆箱の中から取り出したその時、先生

が手を滑らせて赤鉛筆を落としてしまう。

カッ カランカランカラ……

という、軽く、固く、冷たい無機質な音が、妙に目立って聞こえた気がした。

ダダダダダダダダ

??????

D^デS^シh^{シュー}K^カ特有の、腹の底から唸るようなあの鈍く重い連射音が突然耳をつんざく。

カランカランカランカランカラン

空葉莢が地面に落ちる音が、連射音と共鳴する。

┌

┌

┌

ダダダダダダダダ

カランカランカランカランカラン

どういう訳かクラスのみんなの声シャットアウトされて、機関銃の音のみが唯一聞き取れる状態に陥る。

絶対に安全な位置から深淵を覗いていたとき、不意に背中を突き飛ばされて魑魅魍魎が蠢く暗闇の中におちちやつた……。

今の状況を表すとすれば、だいたいこんな感じだ。

一瞬にして、情緒が激しく揺さぶられてしまう。

眼がカツと見開き、耳がピンと立つ。

心臓が激しく、そして間隔を異常なほど切り詰めて鼓動する。不快だった。

立ち上がらんと言わんばかりに内脹脛に力が入るが、立てない。

脚が竦んでいるのだと、間もなくして気づいた。

そのもどかしさが頬筋に伝授して、苦し紛れに噛み締めるといふ今考えうる限り精一杯の余裕を与える。

きつと、今の俺の顔はまるで威嚇しているような恐ろしい形相になっているのだから。

それだけは簡単に想像することができた。

突然の事態に何が起きているのか脳の処理が追い付かなくて、体が金縛りにあつたように竦み上がる。

そんな状況で、助けを呼べるわけがない。

今できることはただ一つ。

できるだけ早く、とにかく早くこの悪夢から目覚めることを祈る他ないのだ。

—撃ち方やめ！撃ち方やめ！

あの頃のように射撃の中止を命令する。

だが、軍規に反して、機関銃は獰猛な口から火を噴き続ける。

—軍規違反は重罪だぞ！だからやめろ！お前だつてこれ以上辛い思いはしたくないだろう！？

と、極めて強硬な口調で、存在しない射手に対して説得する。

相手の苦勞に同情しつつも、自分もまた苦勞しているからこれ以上迷惑かけないでくれという本音が入り混じる。

心の余裕（残量）がいよいよ耐えきれないところまできているのだと、よりいっそう、自分が今危険な状態に置かれている事を嫌でも察してしまう。

”ソレを認知した瞬間”、”ソレに呑み込まれてしまう”ような気がしてならなかった。

そんな、根拠のない不安感が心の中でどんどん広がっていく。

必死に目隠しをしているような心境だった。

ダダダダ シュウウウウ……
射撃が止む。

「——つてことがあつてさ——」

「わかる——」

撃ち終わったとき特有の冷やされるあの音と共に、周囲の音が元に戻る。

まるで下手な笛のように息を荒げつつも、半現実世界から現実世界へ帰れたことに、心底ホツとする。

とてつもない安心感でいっぱいだった。

——せんばいッ……！こわかったんですよッ……！

心臓がギユツとなる。

完全に油断していた。

いきなり首根っこを締められたような不意打ちに襲われてしまう。
思い出す、あの時の光景。

若白髪が混じった青毛のショートボブ

灰色の粉塵にまみれて痩せこけた童顔

ひび割れたヘルメット

虚ろな碧眼

小刻みに震える体

二等兵の階級章

あの後輩の要素がポンポン湧き出てくる。

あいつは恐ろしくてしかなかったはずだ。

だがしかし、恐怖で表情筋が引きつっていたりだとか、涙していたとか、そういう普通なら感じるであろう感情が不気味な事に、一切表に出ていなかった。

そればかりか、すべてを諦めたと言わんばかりの……いや、この比喻でさえ安直だろう。

本当に、とても他人が共有できる代物じゃないほどの虚無感を模ったような、真顔だった。

心がもう、壊れてしまっていたことは明白だった。

でも、助けてやれなかった。

助けを求めるあの声に、2000ヤード先を凝視するような虚ろなあの表情……

あいつは今も、あの姿のまま、俺のなかで生き続けている。

「失礼しまゝ……」

トレーナー室に入ると、そこにはデスクワークをしているカッシーがいた。

「おや、スパシテル。ミーティング開始までの時間はまだありますよ?」

カッシーはタイピングを止めると、顔をこちらの方に向け、目を合わせて落ち着いた口調で話しかける。

社会的には5分前集合が常識だろう。

しかしながら、いざ本当の非常事態となれば、5分程度では間に合わない。

であるのならば、10分前、余裕があるのであれば30分前には配置を済ませておけば、いざという時に万全の態勢で備えることができるのだ。

これは、俺が軍歴で培った経験則である。

「何事も備えておくに越したことはありませんからね。1cmでも早くゴールするためには、こうした日ごろの行動が重要なのだと思います」

「いい心がけです。さあ、そこに座ってください」

そう言われて、俺は応接に使われるソファアに座る。

カッシーはカチツカチツカチツとマウスを何度かクリックすると、ファイリングされた資料を手にとって、俺の前にあるもう一つのソファアに座る。

「これを見せてください」

と言うと、カッシーはファイルを開く。

それをクルつと半回転させると、わざわざ読みやすいように俺の向きに合わせて資料をテーブルの上に置く。

「これは……」

それは、1月から12月、1年間に行われるレースの予定表だった。

しかも、ただ予定が羅列されているワケではない。

ジュニア・クラシック・テイアラ・古バ出走可能のレースなど、読者が簡単にパッと見て情報を取捨選択できるような工夫がなされていた。

また、短距離・マイル・中距離・長距離等の大まかな距離区分別で色分けがなされている。

なかなか読みやすい資料だと、そのような第一印象を感じた。

「スパシテル自身はもう理解しているでしょう。今のあなたはここ、ジュニア級だから、将来的にはこういったレースに出ることになります」

指で円を描いて、強調する。

そこには、函館ジュニアステークスだとか、阪神ジュベナイルフリーズなどといったレース名が記載されていた。

「ですが、今のスパシテルは未出走、未勝利状態です。なので、メイクデビューなり未勝利戦を勝って、最低でも一勝を上げないとこうしたものには出れません」

「つまり、これからはその一勝に向けたトレーニングをしていく…という訳ですか?」
話の流れからなんとなく、カツシーが求めているであろうことを推測して、実際にぶつけてみる。

「そういうことです」

当たったようだ。

「トレーニングを始める前にまず、あなたの適性を発掘する必要があります」

「適性……ですか」

「そう、全距離、全脚質が行けるオールラウンダーというウマ娘は歴史上あまりいませんからね。下手にすべていこうとするよりも、自分にとって得意なポイントを重点的に伸ばしたほうが、勝てる確率を底上げできますからね。やっておいて損することはないでしょう」

「なるほど……」

要は、勝てる確率を1%でも上げられるのならそつちを攻めた方がいいというのがカツシーの考えのようだ。

これ自体は十分理解できる考えだ。

全国から選抜かれた上位の天才どもが跋扈するここトウインクルシリーズでは、そうしたコンマの要素でさえも生死を分けるといふ事を、俺はもう理解している。

故に俺はそれに賛同し、素直に了承する。

「ちなみに、日本レース史において全距離で優勝経験があるウマ……」

「タケシバオー！」

「お見事っ！……と、駄弁はともかく、これから本格的なトレーニングを始める前に、まず適性を見つけるトレーニングをこの後行います。準備はよろしいですか？」

「もちろん！準備万端です！」

俺は元氣いっぱいに返事をする。

あまりの勢いでつい右手が出そうになったが、寸でのところで堪える。

答礼の癖がなかなか抜けなくて辛い。

「良い返事です。ではスパシテル、あなたはジャージに着替えてコース練習場に行ってください。そこで私と合流して、より詳細なトレーニングの内容を伝えます。では、行きましょう」

「はい！わかりました！」

ってなわけで、いざ出陣！

私は、自分で解いた計算式を疑った。

まるで、テストを解いているときに、似たような解が連続して出てきてしまったときのような不安感を覚える。

ただのプリントに書かれた、何の変哲もない文字列。

しかし、その最後に導き出された数値がとんでもない。

同年代の水準と比べて、信じられないレベルで突出していたのである。

「かーッ！一生懸命走った後は暑いっすわあ……」

「え、ええ……お疲れ様、スパシテル。良い走りでしたよ」

私は、驚きを内に隠すように笑顔を取り繕って、スパシテルを労う。

すると、巨大な風船の空気がゆっくりと抜けるような溜め息をしながら、彼女はその場にへたり込む。

彼女は疲れているようだった。

しかし、なんとというか——小休憩を挟めばまだまだ行けそうな余力が残っている——と、心なしかそう感じる。

彼女はこれ以上にもっと伸びるのかと、期待と畏怖が入り混じった興奮で頭の中が
いっぱいになる。

「あ、そうだ……トレーナーさん、どうです！私の適性は?！」

唐突になにかを考え付いたスパシテルは、にんまり微笑みながら私に問いかける。

「えつと……うーん、さすがにすぐ適性が分かるという訳ではありませんからね。これ
で得られたデータを総合的に判断して、やっと適性の全体像がなんとなくわかるので、
今すぐにとというのは……厳しいですね」

正直なところ、数字が必ずしも正しいとも限らないのがこの界限だ。

例えば、スプリンターだと思われていたウマ娘が、いきなり長距離で好成績を収めた
り、ダート適性と思われていた矢先、芝で好成績を収めた——など、まさに事実は小説
よりも奇なりというようなミラクルが起こりえるのだ。

これで得られた数字というのはあくまでも基準に過ぎず、またこれを導き出すには時
間がかかるという事を、結果を焦るスパシテルに伝える。

「あつすみません、急かしちゃって……」

するとスパシテルはシヨボンとした顔つきになり、無茶を強いていた事を謝る。

「なあに、心配しなくていいですよ。結果を早く知りたいのは私も一緒ですから」

と私が言うのと、徐々にスパシテルの顔が明るくなる。

「あと、なかなか良い数値を叩きだしましたね。素晴らしい……期待してますよ、スパシテル」

「……はいっ！がんばります！」

満面の笑みで、そして右腕がほんの僅かに震えて、彼女は元気よく返事をする。

そこには、年相応の少女的な動機と、行動と、可愛らしさがあった。

あのとき、一瞬だけでも彼女は普通の女の子であったはずなのだ。

それだけは、絶対に忘れない。

第6話 2000ヤードの凝視

後世に名を遺すウマ娘から、一度も栄光を浴びぬまま夢打ち砕かれるウマ娘まで、全ての競争ウマ娘が通る道がある。

その名も、”メイクデビュー”。

全てのウマ娘のスタートライン。

走者はたくさん、しかし勝ち上れる枠は一つのみ。

より大きな栄光を掴むためには、必ず通らなければならないレースであるからこそ、全国で抜きこんでた才能を持つ数多のウマ娘が挑むのだ。

最も実力がある者が勝つのは当然の事。

しかし、例えこのレースを快勝したとしても、それはこれから訪れる熾烈な競争生活の序章に過ぎない……というのが、メイクデビューのざつくりとした概要である。

要するに、レース界の義務教育みたいなものだと思えばなんとかなる。

そして、今の俺はまだ未出走の状態であるため、当然メイクデビューに出る必要がある。

「この前はお疲れさまでした。全体的に良好な結果でしたので、これなら重賞も夢では

ないでしょう」

トレーナー室にて、この前の結果がようやく出たという旨が伝えられる。

全体的に結果は良好で、しかも重賞も狙えなくもないとのことだ。

カツシーの労いと、俺の力はここでも十分に通じることが分かって、早速気分がウキウキわくわく高揚する。

やったぜ！

「え、それで……スパシテル、本題のあなたの適性についてなん……ですけども……」

いつもは冷静沈着に淡々と話を進めるカツシーだが、今回はどうにも歯切れの悪い曖昧な言葉がまず飛び出てくる。しかもチラチラ目線を逸らし始めるときた。

こんな仕草はカツシーにしては珍しい。

はっ！まさか、実は一部だけ突出した悪い結果が出てしまい、それを正直に伝えて良いか躊躇してるのでは？と、ハラハラする展開が頭の中を過って、先ほどの高揚感から打って変わって妙な緊張感が心を張り詰める。

しかし、早々にその考えは間違っていたということが判明する。

「わかりませんでした……」

「えっ!?!」

マジか?!

俺は思わず驚愕する。

まさか、悪い結果が出たとかそれ以前の話だったとはさすがに想定外だ。

あのカツシーでさえも分からないということがあるのか?!

とにかく、色々な意味で今俺はびっくりしている。

「えっ、とく……その、”わからなかった”とは、具体的にどういう意味で……」

困惑が混じった口ぶりで、俺はそのわからなかった原因を問い詰める。

「厳密に言えば、全ての面で適性が見られると言いましたよ……」

「えっ?!」

俺は再度驚く。

全方面に適性があるとかなんだそれ?!

逆に考えて、苦手な部分が無いのだから適性という本来の言葉の意味が機能しなくなるではないか!

という事はさておき、そんな万能だなんてありえるのか?

さすがに信じられない。

カツシーが言うその摩訶不思議な結果を完全に理解するためには、より詳しくカツシーの話を聞くべきだと俺は理解する。

「まず、スパは自身のスタートダッシュと最後の伸びが素晴らしいのはご存じでしょう

「？」

「はっ」

曲がり角や、瓦礫の山が出来上がることのある市街地では、ウマ娘が加速するのに必要な分の距離が少ない。

そのため、生き残るためには必然と、超短距離で急加速し、己が持つ最高速度へ一瞬で到達する術を身に付けなくてはならないのだ。

また、走る時は当然のことながら、足元にも注意を向けなくてはならない。

ガラス片やレンガ片などといった小さい起伏はともかく、地雷を踏みぬくというリスクも考慮しなければならない。

地雷を踏まない一番簡単な手段は、地雷を踏まないことである。

○泉構文で申し訳ないが、本当に文面そのままの意味を想像してくれば問題ない。ともかく、やるべきことは至ってシンプルだ。

なんせ、地面に足がつく回数を減らせばいいだけなのだから。

なので、生きるためには必然と、空中に長く滞空しつつも、なおかつ前へ進めるような走法に矯正される。

かくして、ストライド走法とピッチ走法がミックスされた奇妙な走り方が生まれたのである。

「次に距離。スパのスタミナは同年代と比べて明らかに突出しているので、ステイヤーの素質があるでしょう。また、先ほど述べたスタートダッシュの速さもあるので、スプリンターとしても活躍できるかもしれません」

いや！結局長距離のステイヤーか短距離のスプリンターかどっちやねん！

素質か、はたまた戦前以前に幼少期から栄養が不足しがちだったためか、気づいたら体が低燃費仕様になっていた。

この体質のおかげで今日まで生き残れたと言っても過言ではないだろう。

アドレナリンで頭がおかしくなっていたというのもあるだろうが、三日三晩不眠不休で戦場を駆け巡っても、深刻的な体力不足には陥らなかつたことがある。

今後、栄養状態が改善されれば、さらに伸ばすことが可能だろう。

「逃げ・先行・差し・追込、それらの脚質をこなせるだけの瞬発力だとか、パワーが十分に備わっているのです、レースの展開に合わせて臨機応変に使いこなせばさらに化けるでしょう。それに加えて、芝とダートも苦手ではありませんよ。このように、スパは全方位を満遍なくカバーしてます」

「な、なるほど……」

とりあえず凄いらしいことが分かって、俺は啞然とする。

要するに、俺はオールラウンダー型という訳だ。

え！全部こなせるとか最強じゃん！と、一見するとポジティブに捉えることもできないだろう。

しかし、これには思いもよらぬ落とし穴がある。

得意不得意がハッキリしていれば、自分に合った最適なトレーニングやレース選択ができるだろう。

もしこれが他のウマ娘であったのなら、ある程度得意距離や適正距離が自ずと決まっているはずなので、そこから逆算して勝ち負けを予測する事が可能だ。

そう、得意な事をさらに磨き、伸ばすことができるのである。

しかし俺の場合、中途半端に全方面をカバーしているときた。

いわば器用貧乏とでも言えよう。

トレーニングやレース選択の軸が定まらないことによって、ゲーム的感觉で言うところの経験値にばらつきが生まれる。

たとえ総合点で相手を上回っていたとしても、かのサクラバクシンオーのような一芸に秀でた者と対戦した場合、勝てない可能性があるのである。

「あくまでもこれは計算上の話です。今後レースに出るにつれて、経験と勘を蓄積していくことで、本当の自分の適性というものがわかるかもしれません」

と、カッシーは言う。

それに対して俺は、なるほどと言わんばかりに相槌で反応する。

短距離で好走した者が長距離で好走……のように、実際にレースをこなしてみること
で真の適性があるかもしれないという論に、俺は「確かに」と納得する。

ちやんと前例があるからあり得そうな気がするのだ。

「ところで、私のメイクデビューはどうなるのですか?」

ちようにどいい感じに話に区切りが見えたので、こちらから本題を問い詰めてみる。

「おっと、そうでした」

絶妙に不安感を煽るセリフと共に、カッシーはファイルの中からプリントを取り出し、テーブルに置く。

「これは……」

「札幌レース場の図面です」

文字通り、それは札幌レース場のコースの図面だった。

コーナーがでかい!などと物思いに耽りながらプリントを見つめていると、カッシー
はおもむろに胸ポケットに差してあったペンを手に取る。

すると、ペンをまるで指揮棒を振るうように注目してほしいポイントをタンタンと指
して使い始める。

「スパシテルには、札幌の洋芝、1800m右回を走ってもらおうと考えています」

ぐるっと、コースの上で大きな円がなぞられる。

「そもそも、スパシテルは自身の故郷の芝と、日本の芝の性質が根本的に違うという事を知っていますか？」

「はい、授業で習いましたし、ここへ来る前から独学で学んでいたもので、そこらあたりの事情は既に周知しています」

この理屈を正確に説明しようとするのと長くなるのでざっくり述べると、欧州の芝は日本と比べると力が必要できついよねという話である。

日本はスピード、欧州はパワー&スタミナ重視という感じで棲み分けされている。

「素晴らしい。それで、スパシテルの故郷の芝を再現しているのが、この札幌レース場の洋芝コースです。未勝利を突破する可能性を少しでも上げるためには、スパにとって慣れている馬場の方が良いと判断しました」

「なるほど、わかりました」

ぶっつけ本番で新しい分野に挑むよりも、まずは慣れた分野で挑んだ方が確実に取れるよね、という話だ。

つまり、ハイリスクハイリターンではなく、安定を選んだという訳である。

「ところで、スパはこの図面を見て、何らかの違和感を感じませんか？」

唐突に問い掛けてくる。

まるで、ちゃんと話を聞いているか確認するため、会話中にトラップを仕掛けてくる教師や上司のように。

「違和感？うーんそうですねえ……」

もちろん、俺はちゃんと話を聞いていたので、すぐに反応する。

とりあえず、これを見たときから感じていた疑問点を述べてみる。

「……直線が短くて、コーナーが大きい？」

「そうです」

カッシーはいつにもまして真剣な表情で、俺をじつと見つめる。

「このような形状故に、札幌レース場のレースは逃げ、先行策が有利です」

差しや追い込みを仕掛けるには、直線があまりにも短い。

仮にやるにしても、カーブの最中から捲らねば厳しい。

となると外から大きく回らなければならない。

よりにもよって、この大きなコーナーでだ。

そう、多大な距離ロスが生まれることよって、芝質も相まってさらに多くのスタミナを消費するのである。

しかも、それをこなせるだけのスタミナがあったとて、本領を發揮できるコーナー終わりからゴールまでの距離が短いため、単純に追い込みの本領を發揮する前に”勝ち逃

げ」されてしまうというのが現実である。

「そこで、レースの実際の流れやコツを掴むためにも、スパシテルは先行策を行ってもらおうと考えています」

「先行策ですか」

「はい、そうです。スタートを決めて、位置取りをして、最後の直線に入ったら好位置からスパートを掛ける……レースのスタンダードな流れが、先行策には詰まっています。故に、仮に負けたとしても、得られるものは多いはずです」

とにかく負けてでも学んで来い、ということか。

この方針に、俺はびっくりする。

カッシーは、徹底的に安全安定な方法で、或いは冒険をしない保守的な選択をする人間だと今まで思っていた。

そんな人がまさか、敗北を教育と成長の一環に組み込んでしまうという冒険的・野心的な試みをするとは、普段の素振りからして考えられるだろうか？

思い返せば、メイクデビューでこれほど距離があつて、クセのある馬場を試す事自体冒険していると言えよう。

もつと言え、こんな問題の塊のような自分を担当に迎え入れる時点で、ある意味“覚悟がキマっている”と、出会ったその瞬間から覚悟の片鱗が現れていたと言えるだろう

う。

「その心配はいりません。絶対に、勝ってきますから」

「ええ、私もそう思っています。勝てるはず……いえ、スパシテルならば必ず勝つでしょう」

カツシーは俺が必ず勝つと、わざわざ訂正してまで言い切る。

冷静に物事を見極めるその瞳の奥にある、燃え滾るような挑戦精神が垣間見れたような気がした。

その日以降、カツシー指導の下、より本格的なトレネリングが始まった。

札幌レース場に坂は無いものの、芝の性質上パワーが必要であるため、主に脚を鍛えるトレネニングを中心にこなしていく。

トレセン学園のジム環境は極めて良い。

ユーゴスラビア時代よりも設備が充実しているし、数も多い。

鍛える場としては、まさに天国のような場所だ。

「ふっ……っは……っふっ……」

「その調子です。頑張ってください」

座った状態で重いバールのなものを足で上げる例のマシンことレッグカールを使って、下半身の筋肉を鍛えていく。

カッシー曰く、日常でもレースでも、移動中のバランスが重要なのだと言う。

そのバランスを司る大腿二頭筋という筋肉を鍛えるのが、このマシンとのことだ。

ちなみに、大腿二頭筋はその位置と役割から、走る競技をこなすのに最も重要な筋肉である。

それはともかく、走る姿勢やコーナリングを改善するためには、体幹バランスを整える必要があるということは容易に想像できるし、因果関係に十分な説得力があるだろう。

ただ体を動かしたりするんじゃないやなくて、こうしたマシンを使いこなして効率的に懸念点を改善していこうっていう方針がカッシーらしいなあ。

「ペースが落ちてますよ」

「気を付けます！うおおお！」

いかん！物思いに耽っていたら集中力が落ちてしまう！

カッシーの声で我に返った俺は、悔い改めて奮起する。

その後も、デッドリフト、ヒップスラストなどといった下半身を鍛えるトレーニング

はもちろんの事、ランジやベントオーバーロウ等の上半身を鍛えるトレーニングも行うことで、バランスよく体を鍛えていく。

「……………」

「……………」

ある日のこと、トレーナー室にて、俺とカッシーはとある物を真ん中に置いて、向き合っていた。

その物の名はずばり、”将棋盤”。

そう、俺は今、将棋をしているのである。

「う……………」

タンツ

状況ははつきり言って絶望的だった。

大将が半包围状態におかれ、随伴歩兵の救援は間に合わない。

詰みだった。

現実の戦闘であれば、現場の指揮官が独断で後退命令を出すだろう。

在りし日の恐ろしい経験が頭の中を過って、もう考えられないほど頭の中が混乱して

しまい、よくわからないところへ駒を置いてしまう。

あの時は冷静に人を配置できたのに、今はまともに駒を配置することができない。感覚が鈍ってきたのか。

いや、むしろあの頃感覚がおかしかったのかも知れない。

「王手」

カタツ

眼がカタツとなる。

負ける。

そのことが頭の中を過って、動悸に襲われる。

「……まいりましたっ！」

陣が総崩れになる。

無情にも大将は捕らえられ、敵陣へ連れていかれる。

見るも無残な大敗だ。

「あぁー、そんな……」

「ははは……まだまだですね」

悔しがる俺を、カタツシーは苦笑しつつ駒を片付ける。

「というか、こんなボードゲームで何が鍛えられるんですかトレーナーさん？」

負け惜しみ、そう指摘されたら言い返せない。

まくしたてるような口調で、俺はこのトレーニングの有効性の疑問点を指摘する。

「判断力です」

無礼な態度を取った俺を優しさで戒めるように、カッシーは冷静に話す。

「的確に局面を見極め、適切な位置に駒を進めるといなのが将棋です。レースも同じでしょう？自分の位置を鑑みて、いつ、どのようなタイミングで仕掛けるかだとか、どのような位置を取るかなど、いわば時間が無い中で最適解を見つけるトレーニングとして、将棋をしているのです」

「そうだったんですか……わかりました」

論理的な説明に、俺は納得する。

というか、せざるを得ない。

こんなにも俺の事を考えてトレーニングを組んでくれたのに、その想いに気づけなかった自分を恥じ、目線を合わせるのがやや気まづくなってしまう。

「……さてと、ちょうど区切りが良いところですし、お菓子とお茶でも食べましょうか」
過ぎたことを気にしすぎるのは良くない。

そう言わんばかりのタイミングで、カッシーは戸棚にあるお菓子を取りに行こうとする。

立ち上がろうとしたその瞬間、何の前触れもなくカッシーが倒れた。

「……………え？」

撃たれた時みたいに、パタンと呆気なく倒れたのだ。

一気に胸騒ぎが激しくなる。

「トレーナー!!!」

絶叫しながらカッシーの側へ駆け寄り、固く凝った体をお姫様抱つこのように持ち上げる。

「いてててて……………あ、大丈夫ですよ」

両足の太腿を両手で抑え、苦悶の表情を浮かべている。

どこからどう見ても苦しい思いをしているというのは明らかにもかかわらず、当の本人はケロツとした返答をする。

「いやいや！絶対に大丈夫じゃないでしょ!!これは!!!」

追撃砲にやられて大量出血で死んだ戦友も言っていた!

「大丈夫」だと!

あいつは自分が死ぬと理解して、皆を心配させまいと安心させるために最後の最後まで、笑顔を取り繕って声を掛け続けていた!

でも、明確に熱が無くなった瞬間、あいつは笑顔を解いた。

全てを諦めきったような無念の表情で、あいつは冷たく固まったのだ。

その経験が脳裏に浮かんで、俺は必死な形相で叫び続ける。

「すぐに医務室に行きましよう！」

「大丈夫ですつてば」

「どこが?!」

「足つつただけですから！」

「えっ?」

あまりにも呆気ない理由に拍子抜けしてしまい、俺は思わず心の声が漏れる。

ポカんと、一気に顔の筋肉が解けていくのがよく分かった。

「足が、つつただけです……」

大事な事なので二度言いました。

とでも言わんばかりに、カツシーは恥ずかしそうに目線を泳がせながら念押しする。

とりあえず大事に至らなくて良かったと安心するものの、意外な一面が見れてちよつ

と可愛いと思ってしまう自分がある。

なんて罪な奴なんだと自分を戒めながら、カツシーをソファアームに持つていき、座らせ

る。

「ははは……ありがとうございます。数分もすれば、元通りになるはずですよ」

カッシーは恥じらいを誤魔化しようと苦笑で場を紛らわそうとするが、体と言うのは正直なもので、ツーンと未だにつつていられるであろう太腿を何度もさする。きつそうなのは明らかだった。

「あー、あつはつは！よかった！本当に！本当によかった！大事に至らなくて……」

運動音痴であることをカッシーはあんまり突っ込んでほしくないと察した俺は、ちよつと思いい込みが過ぎただけ、笑い飛ばせる程度の事と強調するため、笑い飛ばしながらカッシーの横に座る。

しかしながら、取り繕った笑顔は最後の最後に堪えきれなくなって、内に秘めていた心情が一気に表情に現れてしまう。

カッシーが無事でよかったという安堵感と、戦場にいた頃の経験がフラッシュバックして、戦場にいるときと同じ手順を繰り返そうとしてしまう自分の異常性に対する恐れと不信感が入り混じる。

言葉のトーンも暗く、低くなり、もはやそこに普段の活発さ、前向きの思考などない。不安、不信、将来に対する悲観、それしか今は存在しないのだ。

「……………」

「くう……うう……」

気まずい。

もう何度同じような経験をしたものか。

自分が情けなくなってくる。

カツシーは未だに痛みから立ち直れておらず、一心不乱に優しく足をさすっている。

そのため、俺が今どんな顔をしているのか気づいていない。

今回ばかりは助かったような気がしてならない。

そんな考えが出てしまうこと自体、罪なんじゃないか？

どんだん、自責の念が増長されていく。

「はあー……なんとまりました……」

若干やつれ気味のカツシーは、苦笑を表情に浮かべながら俺に振り向く。

それに対して俺は、咄嗟に笑顔で「なんとかなつてよかったです」と答える。

「さて、今度こそ……持ってきましようか」

そう言うと、カツシーは立ち上がる。立ち上がった瞬間若干ふらついて、本能的にカバールしようとしかけたものの、そのままカツシーは何ら問題なく戸棚のところへ行き、菓子とお茶を持ってくる。

バリ　バリ

せんべいと、麦茶。

いやいや、老人かなと思わずツツコミみたくなるラインナップだった。

まるで文句を垂れているように思えるかもしれないが、そんなことはない。むしろ、ありがたく、感謝しながら食べている。

なんせ、今世でせんべいを食べたのか、これが初めてだからだ。バリバリと、音を出しながら食べる。

戦場じゃ絶対にありえないことだ。

醤油を炙ったような味と、固い触感を楽しむ。

なんて贅沢な余裕なのだろう。

せんべいと共に、麦茶も飲む。

このささやかな幸せに気づけて良かったと、それを感じるだけの余裕があることに心の底からホツとすると共に、カツシーに感謝する。

「とっころで」

唐突にカツシーが話を口火を切る。

「最近、何か悩み事はありますか？」

ドッ

心臓が一瞬停止する。

まるで、首元に軍刀を突きつけられた時のように、瞬間的衝撃に襲われて反応が鈍くなる。

「特には……大丈夫です」

平然な素振りで、問いに答える。

「そうですか……何かあったら、いつでも、遠慮なく言っているのですよ。スパシテル、私はあなたの味方ですからね」

カッシーは、優しく微笑む。

それに対して俺は、弱々しく「はい…」と答える他なかった。

もつと早く、彼女に救いの手を差し伸べるべきだった。

もつと直接的に、寄り添う必要があった。

「無理に思い出させたら悪化するのでは？」

そんな恐れで躊躇する必要はなかった。

私は“今”、後悔している。

第7話　メイクデビュー

順調にトレーニングを重ねること数週間、ついにメイクデビューの時がやってきた。まるで劇場の舞台裏のような暗闇の中で、俺は心を落ち着かせて、名前が呼ばれる時を待っていた。

『——次は三棒四番、スパシテル。一番人気です』

自分の名前が呼ばれる。

それに呼応して、俺は赤いベールを勢い良く突っ切る。

目の前に広がる、沢山の人々でごった返す観客席。

実際のところ、観衆の中にちらほら空間が目立つ程度の密度なのだが、それでも初めて見たパドックからの光景は圧巻ものだった。

沢山の人々の注目が一点に集まった瞬間、ギラギラとした熱が蠢くその雰囲気には俺は心を打たれる。

ここまで来れて良かった。

と感慨深い気持ちになりながら、俺はパドックの中に戻っていった。

「スパ！スパシテル〜！」

俺を呼ぶ声が聞こえる。

カツシーだ。

俺は足早にカツシーの側に近づく。

「どうですか？初めてのパドックは」

心なしか、いつもよりも柔らかい表情で、カツシーは哲学的な問い掛けをしてくる。

「ううんと…そうですね」

定例分のようなキツチリとした回答の方がいいか？いや、ここは無難に今の気持ち伝えて伝えよう。言葉が濁った僅かな瞬間に、頭をフル回転させてそのような方針に行き着く。

「緊張しちゃいました。なんせ、こんなにもたくさんの方がいるものだから」

「初めは誰だってそうなんですよ。これから慣れていけばいいのです」

カツシーは優しく俺を包み込むように微笑む。

俺はその温かさに安心感を覚え、ふう……と小さく息を吐く。

「はい、わかりました」

「…ところで、作戦の内容は覚えてますか？」

「勿論です。スタートしたら3、4番手に付く。で、第三コーナーまでは溜めて、第四コーナーに差し掛かった辺りで好位置につけるようにペースを上げつつ抜け出す。そして最後の直線で——」

「スパートを掛ける…と」

概ね以前から見込んでいた作戦通りに、レースをこなす予定だ。

「にしても、本当に”自分がペースを作っちゃって”大丈夫なんですかね？」

一つ、前々から不安に思っていた点がある。

それは、この作戦が”自分中心”だった場合にのみ成立するという、不確定な要素が前提であるということだ。結構な割合で運用要素が絡んでいるのである。

「その心配はいりません」

はつきりと、自信を持ってカツシーは断言する。

「スパシテル。今、あなたは一番人気です。これはつまり、あなたが一番勝つだろうと予想されているのです」

まあ当然っちゃ当然の内容をカツシーは言う。

まさか、「一番人気だから一番注目されている！だから大丈夫」みたいな精神論を繰り出すんじゃないだろうな？

理詰めのイメージがあるカッシーがそんなことを言い始めるんじゃないかと、ちよつと焦り始める。

だがしかし、そんな心配はすぐに解消されることとなった。

「あなたの前評判はトレーナーの間でも有名です。故に、レースの道中はあなたをマークするようにと、各々の走者はそのような指示を受けているはずです」

「な、なるほど…」

要は、勝ちそうな奴を道中ブロックして進路を塞いでやったり、執拗に並走して掛けさせたりと、まあそんな感じなんだろう。

マークされるというのは確かにデメリットが多いのだが、逆に考えれば、皆俺を中心に動くとも見ることができると。

であるのならば、その心理を逆に使用してやろうという考えで、カッシーはあのような戦法を策定したのでろう。

俺は十分に理解する。

「では、張り切って行きましょう！」

ポンと、カッシーは両手を俺の両肩に置く。

話を区切るように、カッシーは俺に発破を掛けようとする。

「はいー」

拳を握り、肘を曲げて両手を軽く前へ突き出す小さなガッツポーズを添えて、俺はその期待に応える姿勢を露わにするのであった。

時は来たれり。

ゲートを前にして、そんなセリフが頭の中に過る。

ああこの待ち時間がもどかしい！早く中にいれてくれ！と、急かす気持ちで今は一杯だ。

いやいや、こういう時こそ仏のように冷静にならなければと、我に返って深呼吸をして心を落ち着かせようとしたその瞬間、ファンファーレが流される。

『~~~~~♪♪♪』

「……ッ!!」

いきなり、体中が紐で縛られたようにギユツとなる。

体中の筋肉が強張って、直立不動のように動けない。

固唾を飲んで、胃からの迫りくるものと涙を堪えるようと努力するが、案の定そんな程度じゃ根本的な解決には結びつかない。

「……ふー」

体が元に戻って、ラッパの音がヤバいと気づいたのは、ファンファーレが終わってからの事だった。

「はあ、はあ、はあ……」

息が上がる。

いや、過呼吸と言えようか。

走ったわけでもないのに、不愉快な発汗が体中のそこかしこで起こる。

「大丈夫かい？」

ゲート係の人が、俺に声を掛ける。

すると、まるで呪縛が解けたかのように、いつものように動けるようになった。

「あ、すみません……」

『おっと？3枠4番、ゲート入りに戸惑っているようですね』

実況でも読み上げられちゃったよ恥ずかしい！

しかも、俺が時間を取ってしまったせいで他の走者に迷惑を掛けてしまった。

なんてことをしてしまったんだ自分は！と、自責の念に駆られながら、急いでゲートに入る。

『——ジュニア級メイクデビュー。1800m。14名が出走いたします』

目の前がくらくらして、視点が定まらない。

どんぶらこ、どんぶらここと、まるで船を漕いでいるときのように視界が揺れ動くのだ。ああまずい！集中しないと！と、心の中で喝を入れる。

ギユツと、後ろにやった脚に力を込めて、芝を踏みしめる。

ガタン

ゲートが開かれた。

勢い良く、空中を滑るように前へ踏み出し、急加速する。

スタートは順調だった。

「——ッ！」

さて、まずはイン沿いの3、4番手に付こうと考えて位置取りを進めていたところ、早速仕掛けられる。

先頭で逃げを打つ者が、若干ペースを上げ始めたのだ。

しかも、逃げを打つ者が二人もいるので、彼女らがお互いをけん制するかのようペースが上がっていくのである。

なるほど、自分がペースメーカーになろうと目論んでいるのか。

俺は彼女がしようとしている企みを見抜く。

彼女らの考えとしては、ここで後続が焦って付いていく事でハイペース展開に持ち込

み、スタミナを想定以上に消費させることで、最後の直線に入った時、そのまま勝ち逃げするというビジョンを描いているのだろう。

十分によくできた作戦である。

前残りが有利な札幌レース場の地の利を最大限生かそうとしたのだろう。

しかし、それならカツシーと共に既に対策済みだ。

答えは簡単、”乗らない”。

向こうがその気なら、こちらもまたその気になる必要がある。

強引に、自分のペースを作るのだ。

自分がこのレースの主人公なのだ、他のものは俺中心に足並みを揃えるのだと、傲慢なほど自信を保持する精神が重要なのである。

「……?!」

第三コーナーに差し掛かった時、一瞬、前を行く者と目が合った。

「なんでこんなことになっているの?!」とでも言わんばかりに、困惑した目つきだったことを、一瞬の隙に俺は見逃さなかった。

先頭との差は既に4〜5バ身ほどある。

しかし、焦らない。

第四コーナーに差し掛かろうとしたあたりで、仕掛ける準備に入る。

コーナーの遠心力にやられて、俺の横、前にいる者がほんの僅かに、重心が外へ引つ張られる。

今だ！

一瞬だけ見せた隙へ、強引に体を捻じ込む。

蹴り上げられた芝が直撃しようとも動じない！

意表を突くためにあえて外へ向かって、斜めに滑り込むように俺は位置を上げる。

豆腐を崩すときのように、あっさりと相手は位置を明け渡した。

最後の直線へ入る。

俺は、内ラチ寄りの真ん中に位置していた。

そしてなにより、俺のスパートを遮る存在がない好位置につけていた。

「おおおおお!!!」

ドドドドドドドド

観衆の雄叫びのような歓声をかき消すように、後ろからの足音がどんどん大きくなつていく。

俺が仕掛けた作戦によって、レースはスローペースと化した。

これは、差しや追い込みにとって有利な展開である。

しかしながら、もう何度も述べたように、ここ最後の直線は短く、それらの戦法を

するためには大外を回らなければならない。ここ札幌の大きなコーナーでは、それが命取りとなる。

逃げ、先行、差し、追い込み、全ての戦法の弱点が絶妙に絡み合った結果、何が残るか？

逃げ？

先行？

差し？

追い込み？

否！

このレースを支配した”主役”のみである。

「がんばれスパー!!」

風の便りに乗せられて、熱い感情が籠った応援が届く。

それは、カツシーの声だった。

ウマ娘の耳と言うのは大変高性能なもので、時速60〜70Kで走行していても聞き取ることができる。

また、このような自分にとって関わりのある言葉は聞き取れることを、カクテルパーティー現象ともいう。

しかしながら、今回ばかりはそういった科学的な方面よりも、人情・精神的な方面で理由を求めたいところだ。

カツシーの応援のおかげで、脚のエンジンにさらに強い火が掛かったような気がした。

それが、前へ前へというさらに大きなモチベーション、根性へと昇華される。

「もうむり〜!!」

若干不貞腐れ気味な捨てセリフを吐きながら、前の子がズルズル後ろへ下がっていく。

そして、俺は入れ替わるように先頭へ躍り出る。

この快進撃を止める者は、ゴール板を通過するまで誰も現れなかった。

『スパシテル一着！見事一番人気に応えました！』

「いやはや、見事な勝利でしたね」

「はい、感無量です……」

インタビュアーからの問い掛けに、カッシーは掛かり気味な速さで自身の気持ちを答える。

表面上は冷静を取り繕っているように見えるものの、言葉の中には昂る気持ちが垣間見れるような感じがして、カッシーは本当に嬉しい気持ちで一杯なんだろうと察する。

担当の勝利に共感して、共に喜ぶ。

そう思うと、なんだか嬉しくなる。

そんな具合でインタビュアーをこなしていると、次走はどのような予定なのかという旨の質問がなされた。

それに対してカッシーは、「野路菊ステークスを予定している」と答える。

「阪神の1600mですよね。となると、もしや阪神ジュニア牝バステークスを視野に入れてのレース選択でしょうか？」

「はい、そうです」

即答&断言。

この組み合わせに周囲はどよめく。

新人トレーナーが、しかも勝ったとはいえ実力がまだまだ未知数な担当と共に、現段

階からG1を見据えた壮大なビジョンを描いているのだから、そりや周りも困惑するだろう。

さらに、カッシーは付け加える。

「スパシテルは、G1を勝てる実力を秘めていると私は考えています。マル外でなければ、クラシック制覇も夢ではなかったでしょう。私のような新人が担当に持つには惜しいほどの、大切な存在なのです。スパシテルは」

あまりのも大胆な発言に、周囲はまたしてもどよめく。

と言うか、ここまで重い感情を背負わされていたとは思わなかった。

想像を上回る想いに、俺はなんて反応すればいいのか分からなくなって悶々とする。

「スパシテルさんはどうお考えですか？」

うわ?!唐突にインタビュアーがマイクを向けてくる。

「ええ〜つと」

歯切れが悪いつたらありやしない。

カッシーの大胆な告白に思わず動揺してしまった事を誤魔化すように、さも言葉を今捻りだしてますよ風を装う。いや、それこそかえって逆効果かもしれない。

「と、トレーナーさんの期待に応えられるように頑張ります!」

結局出た答えは、あたりざわりのない無難なしろもの。

しかし、その言葉の裏に隠された思考がはたから見ても筒抜けだったためか、俺がそう答えるなり周りはワツと笑いが起きる。

くうく恥ずかしい！

それから数週間後、阪神レース場のターフにて

「どりゃあああ!!」

『一着スパシテル！四馬身差の連戦連勝快勝！』

「じゃあああ!!」

ってな具合で、俺は思いのほかあっさりと、野路菊ステークスを“追い込み”で一着となった。

二戦二勝——これが今の俺の戦績である。

ジュニア期のG1に出るための実績はもう十分に積んだので、本番目前にして抽選漏れという事態にはならないはずだ。

理論上もう十分な実績があるものの、肝心の阪神ジュニア牝バステークスが行われる

まで、まあまあ長い間がある。

そのため、ここは叩きのために一回ぐらいはレースに出るのではないかと勘繰っていたものの、カツシー曰くそのような予定はないらしく、このまま直行するのだという。となればやることはただ一つ、トレイニングである。

「そのままのペースを維持してください!!」

「はい!!」

河川敷の遊歩道にて、俺はカツシーと共にランニングをしていた。

あの貧弱な榎本理子がランニング!?と思うかもしれない。

だが安心してほしい。

実際は、自転車に乗って並走しつつ指示を飛ばすという、いわば密着指導的役回りである。

「阪神の1600mは実力がモロに出るコースですからね!やはり根本から底上げしておくに越したことは無いのです!!」

「イエスマム!!」

カツシーはチャコチャコ漕ぎながら櫂を飛ばしてくる。

その言葉の鞭を己の体と心に叩きつけ、闘魂注入する。

「トレセーン!？」

「ファイター!!」

夕焼けに照らされた河川敷に、二人の掛け声が響き渡る。

牧歌的な、トレーナーと担当ウマ娘の光景がそこにはあった。

「あゝ あゝ! いたいっ!」

あの勇姿は何処へ……

翌日、トレーナー室へ行ったところ、なんとカツシーがソファで蹲っていたのである。

これはまずい!

咄嗟に危機と察した俺は、瞬時にカツシーの側に飛び、カツシーの容態を確認しようとした。

すると、カツシーは情けない声を漏らしながら理由を言う。

「筋肉痛です」

と……

なんと、自転車を数キロほど漕いだだけで筋肉痛になってしまったらしい。

貧弱すぎかあ。

「うう……うう……そうです、ミーティングを始めなければ……」

「そんな！無理しないでください、トレーナーさん……」

モソつと起き上がると、ソファアの横に置いてあったファイルを手に取り、それを机の上に置く。

厳しいだろうに、痛みを堪えてミーティングを行おうとするその根性を察した俺は、それ以上心配の言葉を掛けず、大人しくソファアに着く。

「スパシテル。あなたが次に走るレースはG1レースです。それも、ジュニア期で一番強いウマ娘を決める……そんな役割を担っているレースなのです。なので、今まで以上に洗練された対策をしなければなりません」

コクリと、相手の目を見ながら深く頷く。

統計学的な話をする、まずデビューできる確率が65%で、ここ中央で一勝を上げれる確率は35%だ。そして、オープン級まで昇格できるのは3%で、G1を勝利できる確率は驚異の0.3%である。

そう、選びに選び抜かれたバケモノ級の天才が集うところが、G1レースなのだ。

そういった数字の面を踏まえてカツシーの話を聞いていると、G1を勝つという事がどれほど難しい事なのか、しみじみと実感する。

「それで、今回私が有力視しているのが、このウマ娘です」

そう言うと、ファイルの中からとある人物の写真とデータをまとめた紙を置く。

「ヒシアマゾン……!?!」

思わず唸る。

「普段仲良くしていることは既に把握してます。しかし、今回ばかりは友達としてではなく、”越えるべきライバル”として見てください」

「越えるべき……ライバルですか……」

ごくりと、固唾を飲む。

今まで仲良くしてた相手を急に倒さなくちゃならないだなんて、そんなの普通なら動揺する。

でも、それぐらいの覚悟、或いは狂気が無ければG1という栄光は取れないのだろう。

蹴落として、蹴落として、蹴落として、山と化したたくさんの夢敗れた屍の上にポツンと一つある栄光を浴びることができるのは、たくさんのことを捨てて、そして得た者のみなのだ。

並大抵のことではないのは明らかである。

カッシーは、そういった心の入れ替えと覚悟をするようにと、カッシーなりの優しさでやんわりと伝えようとしたのだろう。

俺はそれを理解して、うなづいた。

「……では、本題に入ります。阪神ジュニャア牝バステークスでは、野路菊ステークスの時とは違って、中斷辺りから仕掛ける”差し”戦法を使えば勝てるはずです」

「差しを使うんですか？」

俺は疑問を呈する。

と言うのも、差しはその性質上、いざ抜け出そうとしたときに前が壁と化す可能性や、ハイペースだった場合伸びずにそのまま沈む可能性があるのだ。

それに、既に追い込みで実績を残したのだから、わざわざそういったリスクのある戦法を使うのは、いささかりスキーな気がして心配なのだ。

故に、俺は躊躇した。

しかしながら、カッシーはすでに何度も、一見すると安定ではなくリスクを取るよう

な作戦で実績を収めてきた。

今回もまた、場当たり的に見えて実は考え込まれた案なのだろうと、自分が抱いていた先入観を一度取っ払って話を聞き入れる。

「まず、今回は自分がマークする側という前提で作戦を立てています。で、そのマークをする相手こそが、ヒシアマゾンなのです」

スルつと、ヒシアマゾンの顔を指で円描くようになぞる。

「私の見立てでは、彼女は逃げ戦法を打ち、前残りするようハイペース展開に持ち込もうとするはずですよ」

「前残りの展開となると、私も逃げや先行の方が良いのではないのでしょうか？」

「確かに、私も最初はそう考えていました。ですが、彼女もまた、自分以外で最も勝ちそうな相手を警戒するでしょう。その相手こそが、スパシテルなのです」

カツシーは鋭い眼差しで俺を見る。

その気迫に押されて思わずゴクリと喉を噎らせつつ、うなづいた。

「恐らく……いえ、間違いなく、あなたがスパートを掛けようとしたとき、彼女はそれを阻害する位置にいるでしょう。それが最も効率的な“潰し方”ですからね」

たとえばどれほど切れ味のある脚を持っていたとしても、進路に障害物があれば進むことはできない。そんな、当然にして最も恐ろしいリスクをカツシーは挙げる。

「かといって、追い込みだと大きく回らなければならず、逃げきるだけの實力を持つ彼女相手だと間に合わないでしょう」

まるで俺が考える時間を設けるようにほんの少しだけ会話に小休憩を設けると、いい頃合いだと判断したカツシーは「そこで」と続けて話を次の段階へ進める。

「5、6、あるいは7番手、とにかくイン寄りの中団で道中控えて、第4コーナーでバ群が広がったタイミングで抜け出し、前が開けたところまで移動したときにスパートを掛けるという作戦を立てました。これであれば、脚を溜めれてスパートの効果を増やせますし、仮にこれでブロックされたとしても、最悪コーナーを利用して強引に外へ押しのかせれば行けます」

「なるほど……」

外を回ってでも最後のスパートに賭けるといいうなかなか思い切った決断に、俺は言葉が詰まる。

「どうやら、最後の直線は団子状態になるとカツシーは予想したようだ。」

その展開を打破するには、無駄のない一直線のスパートを掛けなければならず、そのためには位置取りに細心の注意を払わなければならない。

難しい事ではあるが、自分にはそこから抜け出して差し切るだけの脚は持っているという事を、既に把握している。

「わかりました。頑張ります！」

気合い十分——とでも言わんばかりに、俺はガッツポーズをキメる。
「ええ、その意気です！ ついてて……」

カッシーもそれに乗って、俺に激励を送る。

かくして、阪神ジュニア牝バステークスへ向けての調整が始まった。